

43201
教科書文庫

4
210
33-1943
25000 29793

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

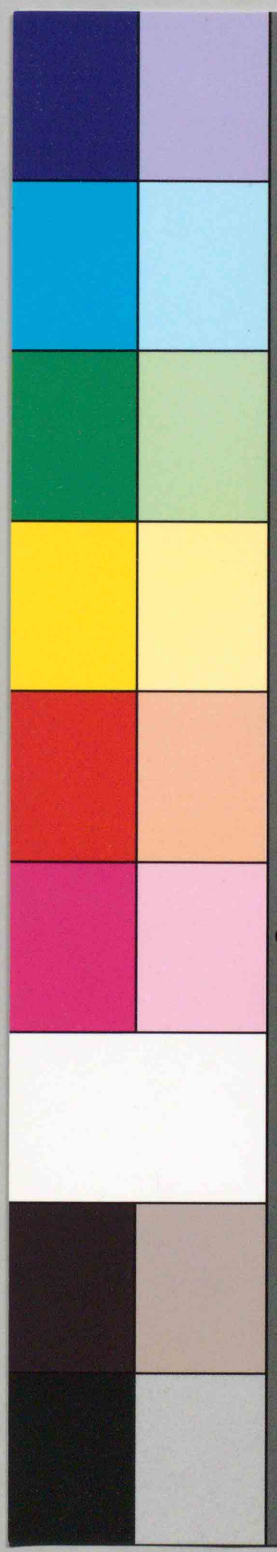
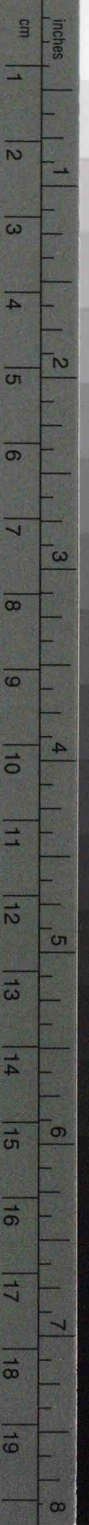


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
210
33-1943
2500029793

初等科國史

文部省

下

教科書文庫

4

210

33-1943

2500029793



初等科國史

下

文部省

登録番号	29793
分	375.932
種	M

広島大学図書

2500029793



神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の
王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。
さきくませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と
窮りなかるべし。



御歴代表

第九代	第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代
開化天皇	孝元天皇	孝靈天皇	孝安天皇	孝昭天皇	懿德天皇	安寧天皇	綏靖天皇	神武天皇
第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	第十代
反正天皇	履中天皇	仁德天皇	應神天皇	仲哀天皇	成務天皇	景行天皇	垂仁天皇	崇神天皇
第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	第十代	第九代
安閑天皇	繼體天皇	武烈天皇	仁賢天皇	顯宗天皇	清寧天皇	雄略天皇	安康天皇	允恭天皇

第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	第十代	第九代	第八代
宣化天皇	欽明天皇	敏達天皇	用明天皇	崇峻天皇	推古天皇	舒明天皇	皇極天皇	孝德天皇	齊明天皇	天智天皇
第九代	第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	第十代	第九代
弘文天皇	天武天皇	持統天皇	文武天皇	元明天皇	元正天皇	聖武天皇	孝謙天皇	淳仁天皇	稱徳天皇	光仁天皇
第十代	第九代	第八代	第七代	第六代	第五代	第四代	第三代	第二代	第一代	第十代
桓武天皇	平城天皇	嵯峨天皇	淳和天皇	仁明天皇	文德天皇	清和天皇	陽成天皇	光孝天皇	宇多天皇	醍醐天皇



四第 代百	三第 代百	二第 代百	一第 代百	第 百代	九第 代十	八第 代十	七第 代十	六第 代十	五第 代十	四第 代十
後 柏原 天皇	後 土御門 天皇	後 花園 天皇	稱 光 天皇	後 小松 天皇	後 龜山 天皇	長 慶 天皇	後 村上 天皇	後 醍醐 天皇	花 園 天皇	後 二條 天皇
五第 代十	四第 代十	三第 代十	二第 代十	一第 代十	十第 代百	九第 代百	八第 代百	七第 代百	六第 代百	五第 代百
櫻 町 天皇	中 御門 天皇	東 山 天皇	靈 元 天皇	後 西 天皇	後 光明 天皇	明 正 天皇	後 水尾 天皇	後 陽成 天皇	正 親町 天皇	後 奈良 天皇
		十第 代二	十第 代二	十第 代二	十第 代二	十第 代二	九第 代十	八第 代十	七第 代十	六第 代十
		今 上 天皇	大 正 天皇	明 治 天皇	孝 明 天皇	仁 孝 天皇	光 格 天皇	後 桃園 天皇	後 櫻町 天皇	桃 園 天皇

一第 代十	十第 代七	九第 代十	八第 代十	七第 代十	六第 代十	五第 代十	三第 代十	二第 代十	一第 代十	
後 三條 天皇	後 冷泉 天皇	後 朱雀 天皇	後 一條 天皇	三 條 天皇	一 條 天皇	花 山 天皇	圓 融 天皇	冷 泉 天皇	村 上 天皇	朱 雀 天皇
二第 代十	一第 代十	十第 代八	九第 代十	八第 代十	七第 代十	六第 代十	五第 代十	四第 代十	三第 代十	二第 代十
後 鳥羽 天皇	安 德 天皇	高 倉 天皇	六 條 天皇	二 條 天皇	後 白河 天皇	近 衛 天皇	崇 德 天皇	鳥 羽 天皇	堀 河 天皇	白 河 天皇
三第 代十	二第 代十	一第 代十	十第 代九	九第 代十	八第 代十	七第 代十	六第 代十	五第 代十	四第 代十	三第 代十
後 伏見 天皇	伏 見 天皇	後 宇多 天皇	龜 山 天皇	後 深草 天皇	後 嵯峨 天皇	四 條 天皇	後 堀河 天皇	仲 恭 天皇	順 德 天皇	土 御門 天皇

目録

第八 御代のしづめ

- 一 安土城……………一
- 二 聚樂第……………九
- 三 扇面の地圖……………十六

第九 江戸と長崎

- 一 参勤交代……………二十四
- 二 日本町……………三十二

三 鎖國……………三十九

第十 御恵みのもと

- 一 大御心……………四十八
- 二 名藩主……………五十六
- 三 國學……………六十六

第十一 うつりゆく世

一 海防……………七十七
 二 尊皇攘夷……………八十五

第十二 のびゆく日本

一 明治の維新……………九十六
 二 憲法と勅語……………百八
 三 富國強兵……………百十六

第十三 東亞のまもり

一 日清戦役……………百二十四
 二 日露戦役……………百三十四

第十四 世界のうごき

一 明治から大正へ……………百四十五
 二 太平洋の波風……………百五十四

第十五 昭和の大御代

一 滿洲事變……………百六十五
 二 大東亞戦争……………百七十三
 三 大御代の御榮え……………百八十一

年表

第八 御代のしづめ

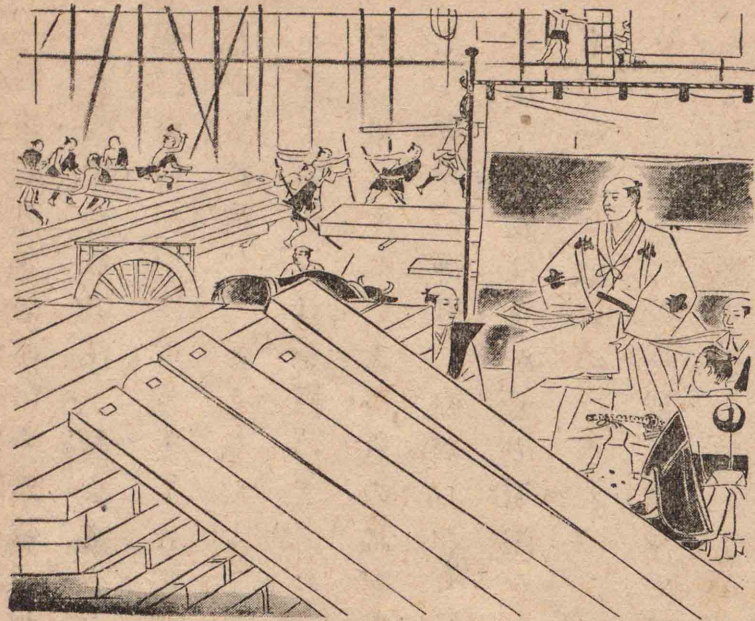
一 安土城

寒風すさぶ戦亂の世も、やつと終りに近づいて、暖い春日がさし始めました。正親町天皇は、雲居はるかに織田信長の武名を聞き召し、永祿七年、おそれ多くも勅使を尾張へおつかはしになつて、一日も早く國々の亂れをしづめるやう、お命じになりました。信長は、仰せを受けて感激の涙にむせび、命をささげて大御心にそひ奉らうと、堅く心に誓ひました。

織田氏代々の根城は尾張の清洲で、信長も、初めはここにゐまし

た。永祿三年、駿河の今川義元が、大軍を率ゐて、尾張に攻め入り、
 した。義元は、遠江・三河を従へた勢に乗じ、更に織田氏を破つて、一
 氣に京都へのぼらうとしたのです。信長は、清洲の城で、家來たち
 と夜話に興じてゐましたが、このしらせを受けても、顔色ひとつか
 へず、そのまま話を續けました。翌朝、みかたのとりでが危いと
 第二報で、すぐさま得意の馬を走らせて、打つて出ました。時に義
 元は、次々の勝軍に心がおこり、桶狭間に陣取つて、酒盛の眞最中
 した。信長は、折からの雷雨をさいはひ、わづかの兵で、不意にその
 本陣を突き、敵兵のうろたへさわいでゐる間に、大將義元を討ち取
 りました。この一戦で、信長の武名は一時に上がり、天下の形勢も
 また、大いに變りました。やがて信長は、美濃の齋藤氏をほろぼし、
 その城を收めて、岐阜に移りました。

信長が皇居を御修理申しあげる



このころ幕府は、すつかり衰へ
 て、將軍義輝が部下に殺されると
 いふ有様です。弟の義昭も、危い
 と見て京都をのがれ、浮草のやう
 に流れ歩いて、最後に信長をたよ
 つて來ました。信長は、永祿十年
 ふたたび勅命を拜して、上洛の準
 備を整へたところでしたが、ここ
 ろよくその求めに應じ、同十一年
 ともに京都に入り、朝廷にお願ひ
 申しあげて、義昭を將軍職につけ
 ました。

信長はまた、皇居を御修理申しあげ、御料を奉つて、ひたすら勤皇の眞心をあらはしました。ここに、久しくすたれてゐた御儀式も復興され、地方にくだつてゐた公家も歸つて、京都は、しだいに元の姿にもどりました。

更に信長は、近畿の諸國を次々にしづめて、人々の苦しみを取り除きました。かうして、信長の評判は、ますます高くなるばかりでした。義昭は、自分の地位をうばはれはしないかと心配し、ひそかに信長を除かうとはかつて、つひに京都から追ひ出されてしまひました。時に紀元二千二百三十三年、天正元年で、義満以來細々と百八十年ばかり續いた室町の幕府も、ここに、まつたくほろびてしまひました。

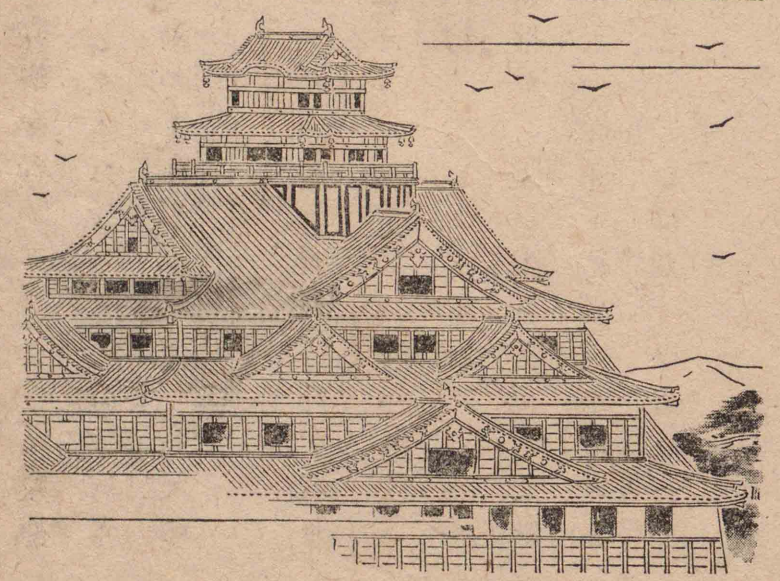
上杉謙信、武田信玄、毛利元就らの諸雄もまた、信長の成功をうら

やみました。しかし、これらの諸

安土城

雄は、ただあせるばかりで、地の利や機會に恵まれず、幕府がほろびる前後數年の間に、ことごとく病死して、つひに、上洛の望みをはたすことができませんでした。

信長は、國內をしづめる根城として、近江の安土に城を築き、天正四年、ここに移りました。この城は、京都に近く、國々との往來が便利な上に、風光にも恵まれてゐました。琵琶湖の眺めの美しい岡



長は、兵火にもえる寺の一室で、しづかに自害しました。まだ四十
九歳といふ働さきざかりでありました。世に、これを本能寺の變と
いひます。

豪華をほこつた安土の城も、その後まもなく、兵火のために焼け
落ちて、今はその城石に、昔をしのぶばかりであります。思へば信
長が、勅命を奉じて海内の平定に乗り出してから、ちやうど十五年、
その偉業もやがて成らうといふ時、かうした最期をとげたのは、ま
ことに惜しいことであります。朝廷では、その功に對して、從一
位・太政大臣をお授けになり、また人々からもうやまはれて、京都の
建勳神社にまつられてゐるのであります。

二 聚樂第

織田信長のあとをうけて、海内平定の遺業をはたし、更に世界の
形勢に目を放つて、國威を海外にかがやかしたのは、豊臣秀吉であ
ります。

秀吉は、尾張の貧しい農家に生まれました。八歳の時、父をなく
して寺で養はれながら、りつぱな武將になりたいたいものと、つねづね
武術に心がけ、勇ましい軍物語を聞くことが、何よりすきでした。
十六歳の時、遠江の松下氏のしもべとなり、やがて信長に仕へまし
た。賢くてまじめで、かげひなたなく働くので、しだいに重く用ひ
られ、つひに部將の列に入りました。その後も、てがらを重ねて、ま
すます信長の信賴を深め、やがて中國平定の大任をまかされるま



ました。本能寺の變からこの時まで、わづかに十一日です。ほかの家來が、京都の近くで、うろたへさわいである間に、秀吉は、かうもあざやかに、主の仇を討つたばかりか、てあつく信長の葬儀までとりおこなひました。人々は目をみはつて驚き、秀吉の評判は、には

でになつたのであります。秀吉は本能寺の變のしらせを受けて大いに驚き、信長の死を深く悲しみました。しかし、吉少しも色にあらはさず、すばやく毛利氏との和議をまとめると、ただちに兵をかへして、光秀を山城の山崎に攻めほろぼし

かに高くなりなりました。

柴田勝家、瀧川一益らの部將は、これをねたんで、秀吉を除かうとたくらみました。秀吉は、敵の大軍をまづ近江の賤嶽に撃ち破り、更に勝家を越前の北庄に追ひつめて、これをほろぼしました。一益は、かなはないと見て、早くも降参しました。賤嶽の戦では、秀吉の部下、加藤清正、福島正則、片桐勝元ら七勇士が、槍を振るつてめざましく戦ひ、七本槍の勇名をとどろかしました。かうして、信長のあとをつぐものは秀吉であると、だれも認めるやうになりました。やがて秀吉は、堅固な城を大阪に築きました。この地は、東と北に大川をひかへ、西は海にのぞんで、天然の要害をなし、交通もまた便利です。しかも、鐵壁の構へに二重の堀をめぐらし、城内の美しさも、安土城の生まれかほりかと思はせました。秀吉は、ここを根

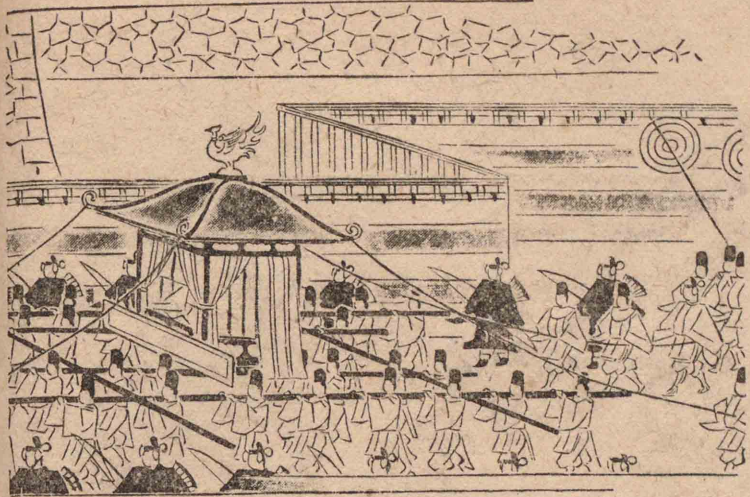
城にして、西に東に軍を進め、四國の長宗我部元親、越中の佐々成政を降し、徳川家康、上杉景勝をみかたにつけて、海内平定の業も、あますところは、東國と九州ばかりになりました。しかも、この間に、石田三成らの人材を選んで、政治の立て直しにも着手させました。朝廷では、秀吉の功をおほめになり、正親町天皇は、藤原氏のほかに例のない關白の職を仰せつけられ、ついで七代後陽成天皇は、太政大臣をお命じになり、豊臣の姓までたまはつたのであります。まことに、武人として最上の面目でありました。

天正十五年、秀吉は威風堂々、軍を九州へ進めました。みちみち、瀬戸内海の風景をめぐるほどの餘裕を示し、たちまち島津氏を従へました。しかも、九州のやうすを調べて、天主教を禁止するなど、政治のことにも、心を配りました。歸るとまもなく、住居を京都の

聚樂第に移しました。この邸もまた、秀吉の氣性さながらに、豪華をきはめたものであります。

天正十六年、都の花も咲きそろつたころ、秀吉は、聚樂第に後陽成天皇の行幸を仰ぎました。この時、秀吉は、文武百官とともに御供を申しあげ、國民もまた、御盛儀を拜觀しようと國々から集り、御道筋は、民草で埋まるばかりでありました。しかも人々は、かがやかしい御代のしるしを、まのあたりに拜し、あまりのうれしさに、夢ではないかとさへ思ひました。戦亂の世をふりかへつて、涙ぐむ老人もあれば、御代の萬歳を祈る若者もありました。天皇は御きげんうるはしく、ここに五日間おとどまりになりました。秀吉はつつしんで御料を奉り、また公家にも領地を分ち、更に武將たちに命じて、いつまでも眞心こめて天皇にお仕へ申しあげるやう、誓はせま

聚樂第の行幸



した。また、工夫をこらした催し
 を、次から次へとお目にかけて、お
 慰め申しあげました。
 そののちも、秀吉は皇居を御増
 築申しあげ、都の町なみをもよく
 整へましたので、朝廷の御有様も、
 京都のやうすも、見違へるほど、り
 つぱになりました。

やがて天正十八年、軍を關東へ
 進めて北條氏を平げ、奥羽の伊達
 氏らも、秀吉の威風になびいて、こ
 ころよく従ひました。ここに、全

國平定の業が完成し、應仁の亂以
 來約百年のさわぎも、すつかりし
 づまりました。時に、紀元二千二
 百五十年でありました。

秀吉は、信長と同じやうに、戦の
 ひまひまに政治の方針を立て、よ
 いと思ふことは、どんどん實行し
 ました。日本が神國であること
 を示して、天主教を取りしまり、全
 國の土地を調べて、税の取り立て
 方を一定し、貨幣を造らせて、商業
 の便をはかり、また貿易に保護を



加へるなど、いろいろ政治の工夫をしました。しかも、つねに士民をいたはり、京都の北野で盛大な茶の湯を催して、人々と喜びをともにしたこともあります。國民の心は、おのづからのびのびとして、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

三 扇面の地圖

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へておりました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亞を建設しようといふ、大きな望

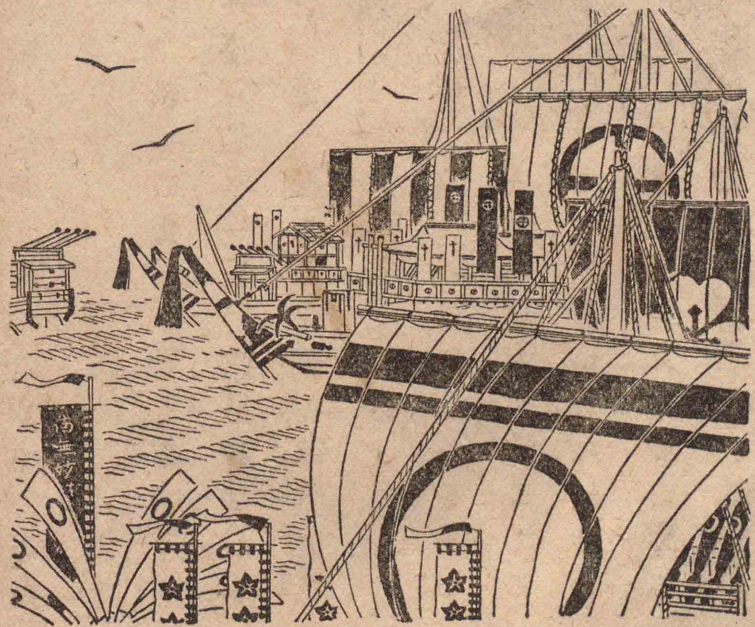
みでありました。九州から歸る途中、對馬の宗氏に命じて、朝鮮に朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。

國內がしづまると、秀吉はいよいよ朝鮮を仲立ちとして、明との交渉を始めようと思ひました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、關白を退いて大閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考へました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前の名護屋に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長・加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思

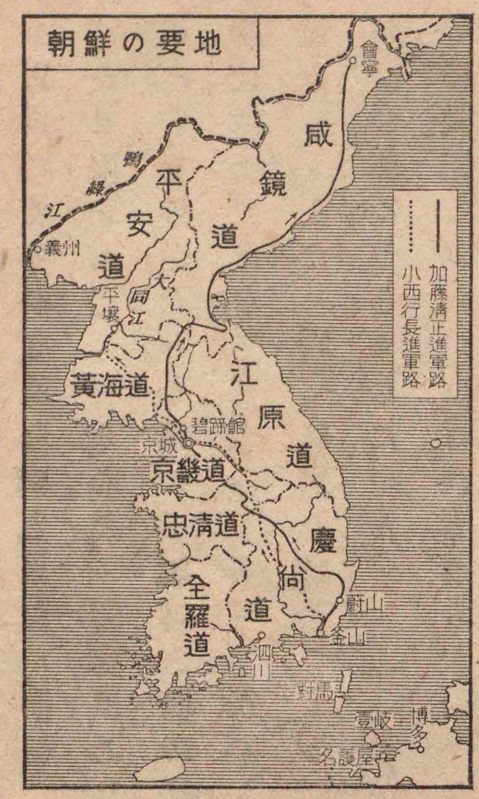
ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな
 びかせ、海をおほつて進みました。
 釜山に上陸したわが軍は、連戦連
 勝、北進また北進して、たちまち京
 城をおとし、いれ、明の援軍を破り、
 わづか四箇月たらずで、ほとんど
 朝鮮全土を従へてしまひました。
 この間、清正はたびたびの戦に、槍
 のほまれ高く、拔群のてがらをあ
 らはし、また、全軍よく軍紀を守つ
 て、人民をあはれみ、日本武士の面
 目を示しました。ただ、水軍の力

軍船の出發



が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備
 には、たいそう苦心しました。

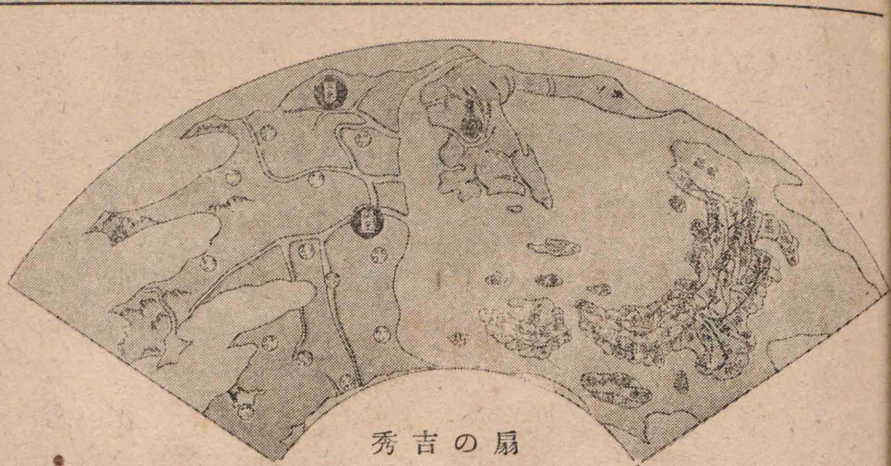
明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑
 怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまら
 うとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景・立花



宗茂らでありました。
 日ごろの手なみを見せ
 るのは今と、出陣のこと
 ばもををしく、六七倍の
 明軍をさんざんに撃ち
 破つて、勇名をとどろか
 したのであります。

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長、清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、泗川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。



秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るもとになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことばが、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本・朝鮮・支那の三國を

がいた東亞地圖になつてゐます。しかもこの地圖は、このころのものとして、かなり正確です。かうした扇あふぎを用ひたことは、秀吉が老の身をいとはず、みづから大陸へ渡らうとしたしるしで、これによつても、その大望と日ごろの心構へが、しのばれるのであります。しかも、このころ東亞の海には、南蠻船なんばんせんがはびこつてゐました。

秀吉は、これに負けないやうに、日本の貿易を盛んにしなければならぬと考へました。ちやうどわが國は、戦亂もすでにしづまつて、産業がいちじるしく進み、國民の貿易熱がぐつと高まつて來てゐました。そこで秀吉は、わが商船に、一々貿易の免許狀を與へて、これを保護する方針を立てました。かうした船を、世に朱印船しゆいせんといひます。その活躍くわつやくぶりは、八幡船はつぱんせんの行動が、勇ましくても、まぢまぢであつたのに比べると、ずつと大がかりでもあり、はなやかでも

ありました。行先も、明などには、あまり目もくれず、黒潮にそつて南へ南へと進みました。さうして、南蠻船とせり合ひながら、國民の海外發展心を、ますます盛んにしたのであります。

御稜威みりょういのもとに、大東亞をしづめようとした秀吉は、一面きはめて孝心に厚い人でありました。へいぜい母に仕へて、なにくれと孝養かうやうをつくし、その死目しためにあへなかつた時など、あたりをかまはず泣き叫んだといふことです。また、つねに恩を忘れず、始めて仕へた松下氏に、多くの領地をおくり、てあつくこれをもてなしました。朝廷では、秀吉の功を賞して、死後、豊國大明神ほうこくたいめいじんの神號しんごうをたまはり、正一位をお授けになりました。京都の豊國神社ほうこくじんに參拜し、また數の遺物や遺跡いせきによつて、秀吉の志をしのぶと、今更のやうに、その偉大さに心を打たれるのであります。

第九 江戸と長崎

一 参勤交代

秀吉がなくなつた時、子の秀頼は、やつと六歳でありました。秀吉は、病氣が重くなるにつけ、秀頼の行く末を深く心配して、徳川家康と前田利家に、くれぐれも、あとのことを頼みました。家康は伏見城で政務をさばく、利家は大阪城で秀頼をそだてる、これが、それぞれに命じられた役目でした。ところで、利家がまもなく病死しましたので、ひとり家康の勢が、目だつて盛んになつて行きました。家康は、三河から出て、初め今川義元の人質となり、義元の死後は

信長と結んで、しだいに勢をのばしました。本能寺の變後、秀吉と小牧山に戦ひ、長久手にその別軍を破つて、武名をあげました。まもなく秀吉に仕へる身となり、小田原攻めにてがらを立てて、北條氏の領地を受けつき、武藏の江戸に根城を移して、關東の主となりました。従つて家康は、秀吉の部下といつても、生え抜きの家來ではなく、しかも、いちばん勢が強かつたのです。

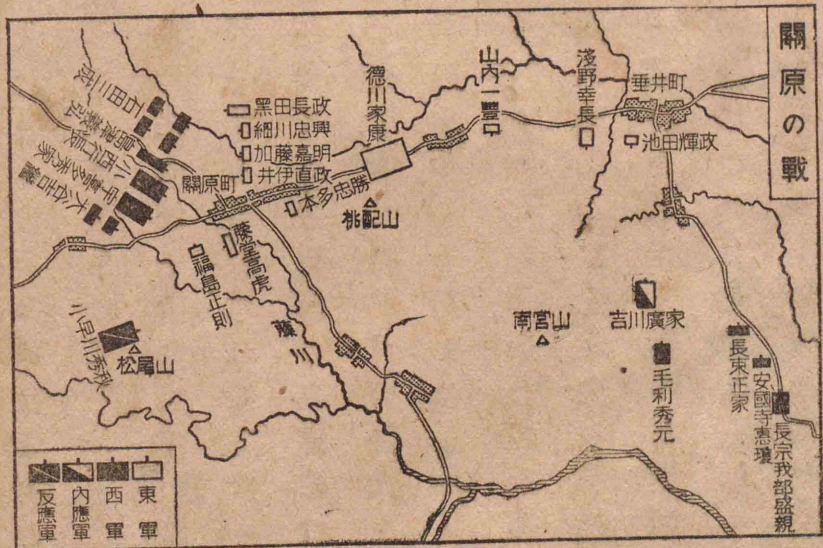
秀吉恩顧の大名石田三成らは、家康の勢が増す一方なので、幼い秀頼の身の上を案じ、毛利輝元や上杉景勝らと力を合はせて、家康を除かうとはかりました。ここに全國の諸大名は、三成方と家康方との二手に分れ、美濃の關原で、激しく戦ひました。初め有利と見られた三成方も、途中裏切者が出て、武運つたなくやぶれ去り、この一戦で、豊臣、徳川兩氏の興廢が定まりました。後陽成天皇の慶

長五年のことで、世に、これを天下分け目の戦といひます。

家康は、關原の戦に勝つと思ひ切つた賞罰をおこなひ、諸大名をすつかり従へてしまひました。秀吉恩顧の大名のうち、三成と仲がわるくて、家康方に加つたものも、かうなつては、家康の命令にそむくことができなくなりました。やがて慶長八年(紀元二千二百六十三年)、家康は、征夷大將軍に任じられて、幕府を江戸に開きました。これで徳川氏は、たれ

はばかるところなく、ふるまふやうになりました。家康は、まもなく將軍職を退き、子の秀忠が將軍に任じられました。

關原の戦ののち、豊臣氏は一大名の姿になりましたが、何といつても、秀頼は大閥秀吉の後つぎです。大きくなるにつれて、しだいに高い官位に進みました。それに、大阪城の守りは堅いし、藏には金銀や兵糧が満ち満ちてゐます。また、諸大名の中には、豊臣氏をもとの勢にかへしたいと考へてゐるものも、少くありません。家康は、それが氣がかりで、豊臣氏の力をそぐために、いろいろ頭をなやましました。幕府を開いてから十年もたち、身は七十の坂を越してみると、心はいよいよあせるばかりです。次から次へと秀頼に難題をもちかけ、豊臣方から兵を擧げるやうに仕向けました。果して慶長十九年の冬、秀頼は、たまりかねて兵を擧げました。



しかも家康は、大軍を以てなほ大阪城を攻めあぐみ、またまたはかりごとを用ひて、つひにこれをおとしいれ、むざんにも、豊臣氏をほろぼしてしまひました。第八代後水尾天皇の御代、元和元年の夏のことでありませう。家康は、豊臣氏をたふした機會に、公家や武士を取りしまるおきてを作つて、幕府の基をますます固くし、翌元和二年、七十五歳でなくなりました。

かうした家康も、政治の上では、秀吉の方針にならひ、その始めた制度を受けつぎました。大名に自治を許すが、しかもこれをきびしく取りしまる、貿易をすすめるが、天主教はこれを禁止する、すべて秀吉と同じ行き方をとりました。ただ、秀吉のはなやかなやり方に比べると、家康の選んだ方法は、きはめてちみでした。學問を盛んにして、太平の世をみちびかうとしたのも、貿易を中心にして、諸外國との交りを深めようとしたのも、まつたくその現れであります。

また家康は、もと秀吉に従つてゐた弱味があるので、大名の取りしまりには、ずるぶん苦心しました。大名の中には、徳川氏の一族(親藩)や、三河以來の家臣(譜代)もありますが、もと徳川氏と同列だつた大藩(外様)がたくさんあります。そこで家康は、大名の配置に工夫をこらし、更にこれをおきてできびしくし、ばるやうにしました。参勤交代といふ制度も、大名取りしまりの、たくみな方法でありました。

参勤交代とは、諸大名に命じて、妻や子を江戸にとどめさせ、大名には、時期を定めて、ある期間、江戸に住まはす制度であります。これで、幕府の大名に對する監督は行き届くし、また大名に、道中その

大名行列

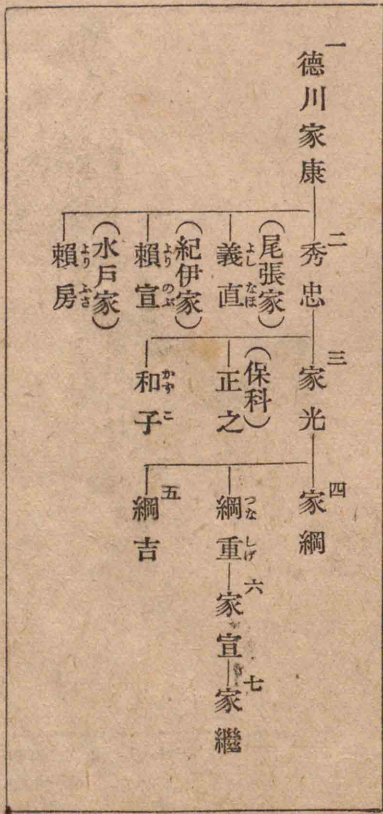


大名の配置



他の費用をかけさせ、幕府にそむく餘裕を興へない仕組みにもなるのです。この制度は、秀忠の子家光の代になつて、すっかり整ひました。

朝廷では、家康をまつた日光の社に、東照宮といふ宮號をお授けになりましたが、この社は、秀忠家光の二代にわたつて造營したものです。かの有名な日暮しの門の完成したのは、後水尾天皇の寛永元年で、家光が將軍に任じられたあくる年のことでした。幕府が開かれてから、もう二十年以上たちましたし、かつて家康



と肩をならべてゐた諸大名も、ほとんど代が變りました。徳川氏の威勢は、家光の代に一だんと高まり、幕府の基も、いよいよ固くなつて來ました。ちやうどこのころ、海外では、朱印船が今を盛りと活躍してゐたのであります。

二 日本町

江戸に幕府が開かれたころ、ヨーロッパ諸國の形勢も、大いに變りました。イスパニヤ・ポルトガルは、しだいに衰へ、新たにオランダとイギリスが、盛んになつて來ました。オランダは、初めイスパニヤに従つてゐましたが、本能寺の變の前年に、獨立しました。イギリスは、これと結び、無敵をほこるイスパニヤの海軍を撃ち破つて、

ヨーロッパの制海權をうばひました。ちやうど、後陽成天皇が聚樂第に行幸あらせられた年のことでありませう。これから、イギリスとオランダの勢が、目だつて盛んになりました。

しぜん英・蘭の兩國人は、東亞にも押し寄せて來ました。イギリス人はインドに、オランダ人は東インド諸島に目をつけ、關原の戦から二三年の間に、それぞれ東インド會社を立てて、東亞の侵略を始めたのです。しかも、そのやり方は、表に貿易をよそほひながら、なかなかずるいところがありました。やがてこの兩國人は、わが國にも來て、貿易を求めました。家康は、慶長十四年、まづオランダ人に、同十八年にはイギリス人に、それぞれ貿易を許しました。兩國人は、まもなく平戸を足場にして、激しい競争を始めました。ところで、オランダ人は、一方東インド諸島で、ポルトガルの勢力を押し

しのけ、元和五年には、ジャワのバタビヤ(今のジャカルタ)に總督を置くほどの勢でした。イギリス人は、オランダ人に敵しかね、元和九年、わが國を去つてもつばらインドの侵略に力を注ぎました。

わが朱印船は、かうした古手、新手のはびこる南洋へ、勇ましく乗りこんで行きました。秀吉や家康が貿易をすすめるまでもなく、國民の海外發展心は、もえさかつてゐました。京都、大阪、堺、長崎などの商人や、九州の大名らは、先を争つて南方の各地へ進出しました。船も、末次船や角倉船のやうに、八幡船とは比較にならないほど、りつぱになりました。長さ二十五間、幅四間半、三百人乗りの船さへできました。航海の技術も進歩しました。しかし、まだまだこの程度の船や技術で、波風の荒い東支那海や暗礁の多い南支那海を乗り切ることは、なかなか容易ではありませんでした。それ



でも、發展の意氣にもえた國民は、海國魂にものをいはせて、どんな苦難くをものぎました。かうして、南洋へ渡つた朱印船は、幕府が開かれてからおよそ三十年間に、約三百五十隻にも及びました。南方に移住する人々も、どんどんふえて、その數は、少くも一萬人に達したといはれてゐます。これらの人々は、今の東部インド支那、タイ國、フィリピンなどの各地に、日本町を立てて、活動の根城にしました。その

中には、人口二千人以上の町や、日本橋と名づけた橋のある町などがあつて、その活躍は、まことにめざましいものでありました。町の人々は、心を一つにして貿易や産業にはげみ、また土地の人ともしたしくうち交り、事があれば武勇をあらはして、大いに國威をかがやかしました。中でも、山田長政が、日本町の人々を率ゐて、シヤムの内亂を



しづめ、その功によつて重く用ひられた話は、いちばん有名です。明かるい海、青々とした木々を背景にして、白壁づくりの軒を連ねた日本町の生活は、繪のやうに美しく、夢のやうにおだやかでした。しかし南洋には、すでにヨーロッパ人の勢力がくひ入つてゐます。日本町の人々も、朱印船の商人も、ともどもに力を合はせて、これと競争しなければなりません。その場合、土地の人々は、つねにまじめで勇敢な日本人の奮闘を、心からたのもしく思ひました。濱田彌兵衛が臺灣で、オランダの長官をこらしめた話などから、これがうかがはれます。臺灣は、わが國と南洋との中間に位し、朱印船の南方進出の上に、たいそう重要な地點でした。ところがオランダ人は、寛永元年に、臺南附近を占領して、臺灣の富を獨占しようとしたばかりか、わが朱印船の南方進出をさへ、さまたげ

ようとしたのです。彌兵衛がその不法をなじり、命をかけてそのいひ分を通したのは、まさに日本人の意氣と面目を示してあまりあるものです。

もえさかる國民の海外發展心は、このほかにも、多くの勇ましい話をとどめてゐます。早くも文祿年間、信濃の城主小笠原貞頼は、小笠原諸島を發見して「日本國天照皇大神宮地」と記した標柱を立てました。その後、慶長年間には、九州の大名有馬晴信が、ポルトガル人の不法に對する仕返しとして、長崎でポルトガル船を焼討ちしました。また加藤清正が、大船を造つて安南との貿易を計畫した話や、支倉常長が、伊達政宗の命を受け、太平大西の兩洋を横ぎつてローマに使ひした話も傳へられてゐます。更に寛永年間には、播磨の人天竺徳兵衛が、十五歳の若さでシャムに渡つた話や、九州の

大名松倉重政が、フィリピン征伐を計畫した話があります。

八幡船のまいた種が、今こそ花を開いて、國民の海外發展心は、とどまるところを知らない有様となりました。ところが、このみごととな花も、幕府が國內の太平をたもつために、やがて國を鎖すに及んで、惜しくも散つてしまつたのであります。

三 鎖 國

ヨーロッパ人が日本へ來て、天主教をひろめたのは、國民の氣のゆるみに乗じて、わが國を従へようとするためでありました。國民は、かうした下心があることを少しも知らず、信徒の中には、むやみに新しがつて、社や寺をこはし、先祖の位牌を川に流すなど、わが國

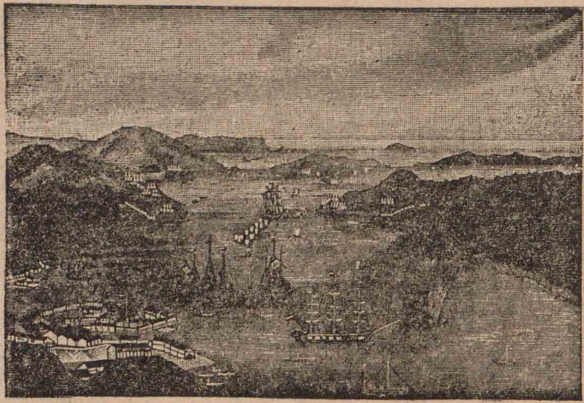
の美風をそこなふものさへありました。秀吉は、天主教の害を知ると、ただちにこれを禁止し、家康もまた、その方針を受けつぎました。ところが二人とも、貿易を奨励しましたので、そのすきに宣教師がまぎれこみ、ひそかに布教を續けました。その後、秀忠、家光と代を重ねるにつれて、天主教の取りしまりは、ますますきびしくなりました。幕府は、懸賞踏繪宗門改めなどの方法を用ひて、これを根だやししようとし、寛永七年には、洋書の輸入を禁止しました。ところが、幕府は、諸大名の叛亂を恐れて、武備を制限しましたので、いざといふ場合、國を守る自信がありませんでした。これに加へて、九州には、外様大名や天主教の信徒が多いため、いつ叛亂が起るか分からない有様でした。幕府は、大名が貿易の目的で大船を造ることさへ、警戒するやうになり、また國民の海外發展にも、しだ

いに制限を加へました。さうして、國民が海外へ行くことも、海外から歸ることも、いつさい禁止してしまひました。第九代明正天皇

の御代、寛永十三年のことであり、なほ幕府は、この時ポルト

ガル人を、長崎の出島に閉ぢこめました。

果して翌十四年、肥前の島原や天草の信徒三萬數千が、幕府のきびしい壓迫にたへかね、亂を起して、島原半島の原城にたてこもりました。その勢は意外に強く、幕府もさんざんてこずりました。十餘萬の大兵をさし向け、兵糧攻めにして、あくる年、やつとこれを平げたほどです。幕府は、この亂にこりて、更に天主教の警戒をきびしくし、

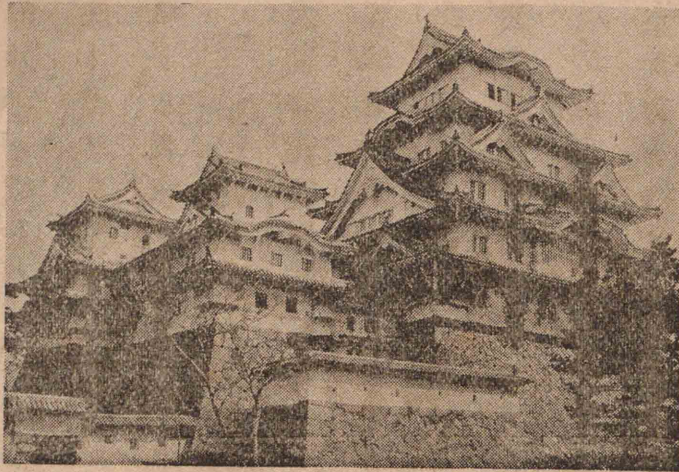


長崎の出島

寛永十六年、ポルトガル人を追ひ拂つて、商船の來航を禁じました。ついで十八年には、オランダ人を出島に移し、支那人同様、長崎の港にかぎつて、貿易を許すことにしました。オランダ人は、天主教の布教に關係しなかつたので、特別の扱ひを受けただけであります。

かうして幕府は、大名の取りしまりと天主教の禁止とをめぐして、國の出入りを鎖してしまひました。ちやうど、紀元二千三百年ころのことで、世にこれを鎖國といひます。八幡船が活躍を始めてから、およそ三百五十年の間、年とともに盛んになつた國民の海外發展は、惜しくも、ここでくじけました。日本町の人々は、なつかしい朱印船の姿が見られず、しぜん、かれらの活動もにぶりませんでした。故里へ歸ることができず、その地でさびしく死に絶えたのでせう。そこで、せつかく築きあげた南方發展の根城も、次から次へと、ヨーロッパ人にくづされて行きました。

海國日本は、これからおよそ二



城 路 姫

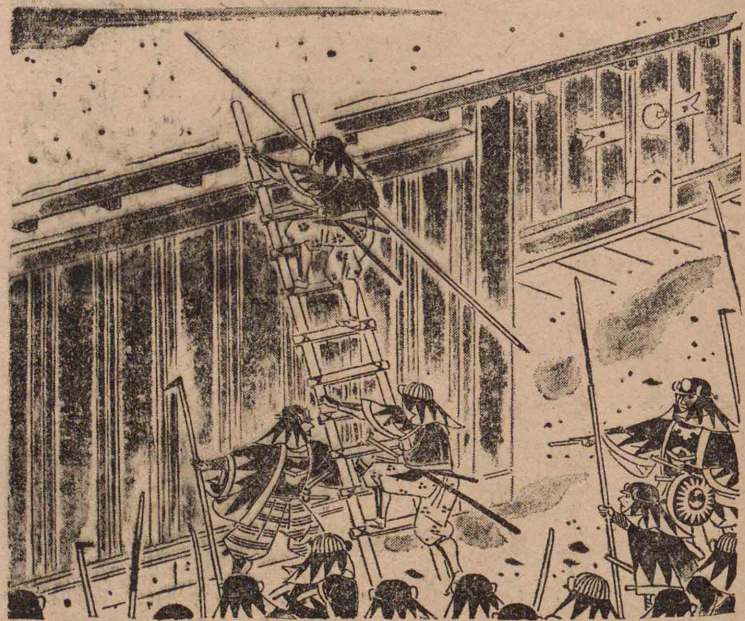
百年の間、島國の姿に變ります。國民は、海外事情にうとくなり、江戸と長崎との間にさへ、遠いへだたりに感じるやうになりました。

鎖國ののち、さすがに太平の世が續きました。江戸城は、見違へるほどりつぱになり、城の周圍には、諸大名の邸が立ち並んで、商人や職人も、各地から續々と集つて來ました。武藏野のすすきや、葛飾の葦を刈り拂つて、江戸の町なみは、年とともにのびて行きました。諸大名の領地にも、とり

どりの城をめぐつて、城下町が發達しました。幕府の奨励と大名の努力とによつて、學問や産業が目だつて盛んになり、また交通機關も整つて來ました。毛槍のさばきおもしろく、下に下にの聲もどかな大名行列は、まさに太平の世のしるしでありました。

第一百十代靈元天皇の御代に、綱吉が將軍に任じられ、やがて第三十代東山天皇の元祿年間になると、長い間の太平で、國民の生活は、いつぱんにはなやかにになりました。武士でさへ、この風に染まつて、尙武の氣風を失ひ、幕府の政治もゆるんで來ました。かうした時に、赤穂義士の仇討ちがあつて、人々の心をひきしめたのでした。播磨赤穂の城主淺野長矩の家老であつた大石良雄を始め、四十七人の浪士が、力を合はせ心をくだいて、つひに主の仇吉良義央を討ち取り、幕府のさばきに従つて、いさぎよく切腹したのです。良雄の子良

金も年わづかに十五歳でこの舉に加り、めざましい働きを示しました。良雄らの眞心とねばりの強さは、勇ましい討ち入りの話とともに、人々に深い感動を與へ、武士のかがみともてはやされました。その後、忠臣蔵といふ芝居にまで仕組まれて、義士のほまれは、いよいよ高くなりました。東京高輪の泉岳寺にある四十七士の墓前には、今もなほ香華の絶えまがありません。



討ち入り(忠臣蔵)

國民の生活がはでになると、國の力が弱ります。長崎の港では、オランダ人が支那の絹織物、南洋の砂糖、西洋のめづらしい品々を賣りさばいて、ばくだいな利益を占めてゐました。國を鎖してから、かれこれ七十年もたちました。その間、天主教がはいらなくなつた代りに、大切な金銀が、どんどん海外に流れ出てゐたのです。その害をさつたのが、新井白石でありました。

綱吉ののち、家宣と家繼が相ついで將軍に任じられました。白石は、この二代に仕へて、いろいろと政治を改めました。その一つが、長崎貿易の制限であります。白石は、まづ貿易の有様をくはしく調べて、金銀の流出があまりにも激しいことに驚き、家繼の時に商船の數をへらし、貿易額を制限して、金銀の流出を防ぎました。白石は、このほかにも、りつばな事蹟をのこしてゐます。

朝廷では、これまで、皇太子におなりになる御方の外、皇族はたいてい出家なさる御習はしてありました。白石は、まことにおそれ多いことに思ひ、宮家をお立てくださるやう、家宣を通して、朝廷に申しあげました。第四百十代中御門天皇は、これをお取りあげになつて、新たに閑院宮家をお立てになりました。また朝鮮は、家康が交りをつ結んで以來、將軍が任じられることに、祝賀の使節を送つて來ました。ところが幕府は、いつもこれを勅使以上に、てあつくもてなしてゐましたので、白石は、國の體面にかかはることと思ひ、家宣に申し出て、そのもてなし方を改めるやうにしました。

白石はまた、鎖國の世でも、海外に目を注ぎ、これに關する本をあらはしてゐます。かうした白石の努力によつて、政治はふたたびひきしまり、太平の世が續きました。

第十 御恵みのもと

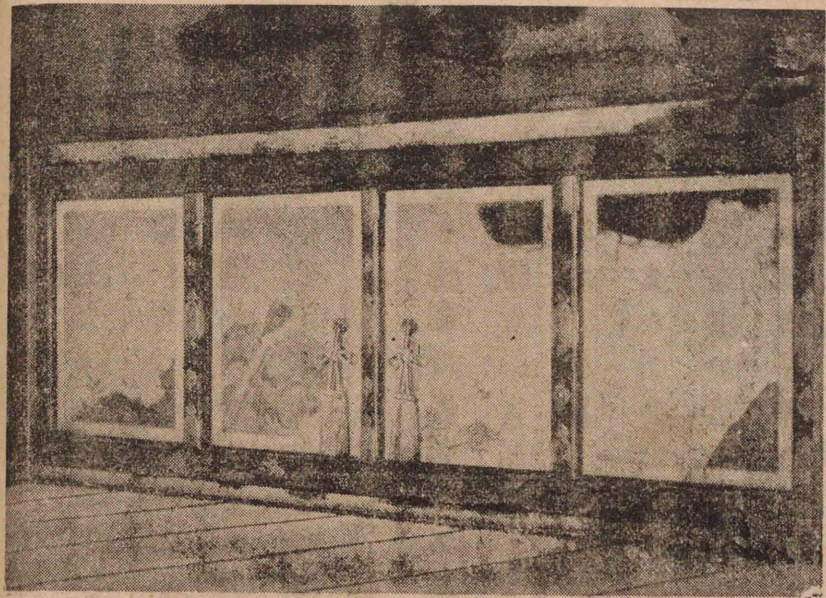
一 大御心

太平の世が続いて、國民が日々の仕事にいそしむことのできたのは、ひとへに御恵みのおかげでありました。にぎやかな江戸とはなやかな長崎、その間には、おごそかな京都があつて、昔の姿を傳へてゐました。京都とその附近一たいを上方といつたのも、京都が都であつたからであります。

幕府では、家康が御所を御増築申しあげたり、御料を奉つたりしてから、家光や綱吉らも、これにならつて、朝廷をうやまひました。

家宣は、白石の意見をいれて、宮家の御創立を奏上しましたし、やがて將軍吉宗は、幕府の建物に御所をまねたところがあつたので、これを取り除いて、つつしみの心をあらはしました。その後、天明年間には、京都の大火で、おそれ多くも御所が焼けましたので、時の老中松平定信は、將軍の命を受けて、りつぱにこれを御造營申しあげました。

しかし、その幕府も、自分の勢を張りたいために、朝廷に對し、ずるぶん申しわけないこともしてゐるのです。京都所司代といふ役目を置き、こまごまと規則を作つて、朝廷の御政治や御日常に、さし出がましいいふるまひに及びました。おそれ多くも朝廷では、寛永三年、後水尾天皇が二條城へお出ましになつて以來、二百三十四年間の、行幸の御事も、御心のままにはならぬ、御有様でありました。



嵐山の櫻が咲いても、高尾の紅葉が色づいても、これをごらんになることが、できなかつたのであります。

内 幕府は、西國の大名が、参勤交代の時に京都を通ることを、禁じて城ゐます。そこで國民の中には、幕府のあることを知つて、皇室の御二恵みをいただいてゐることに氣づかないものが、多くなつて行くといふ有様でした。

御代御代の天皇は、かうした幕

府のわがままをお戒めになるとともに、つねに民草をおいつくしみになり、また、學問をおはげましになつて、わが國の正しい姿を明らかにするやうに、なさいました。

後陽成天皇は、朝廷の御儀式にくはしくいらせられ、日本書紀の神代の巻を印刷して、世におひろめになりました。後水尾天皇も、和歌を始め、國史、國文、制度などを、深く御研究になりました。かうして御二代の間に、學問の盛んになる基をお築きになりました。更に第十代後光明天皇は、御幼少の時から、日課をきめて、學問におはげみになり、御年十一歳で御位をおつぎになりました。つねに公家の氣風をおひきしめになり、また、幕府のわがままをお戒めになりました。

御父後水尾上皇が、御病氣におかかりになつた時のことであり

ます。天皇は、たいそう御心配になつて、ただちにお見まひのため、



後光明天皇

お出ましの旨を仰せ出され
ました。すると、時の所司代
板倉重宗が、幕府に問ひ合は
せる間、しばらくの御猶豫を
御願ひ申しあげましたので、
「朕の外出がそれほど気がか
りならば、皇居から上皇の御
所まで長廊下をつけよ。」と
きびしく重宗をお戒めの上、
したしく上皇をお見まひに
なりました。また、天皇が剣道をお好みになるので、重宗は「江戸に

聞えると、困つたことになりました。おやめくださらないと、臣は切
腹いたさなければなりません。」とお側そばのものまで申し出ました。
「ではさつそく切腹せよ。まだ武人の切腹を見たことがないから、
したしく見物するであらう。」との仰せであります。さすがの重
宗も、すつかり恐れ入つて、深くおわびを申しあげたといふこと
です。かうして、幕府のさし出がましいいふるまひを、きびしくお戒め
になつたので、幕府も、だんだんつつしむやうになりました。
綱吉が將軍に任じられると、やがて朝鮮から、祝賀しゅがの使節が來ま
した。その際、靈元天皇は、

我國わがくにのかぜをやあふぐこま人も

ことしちさとの波ちわけきて

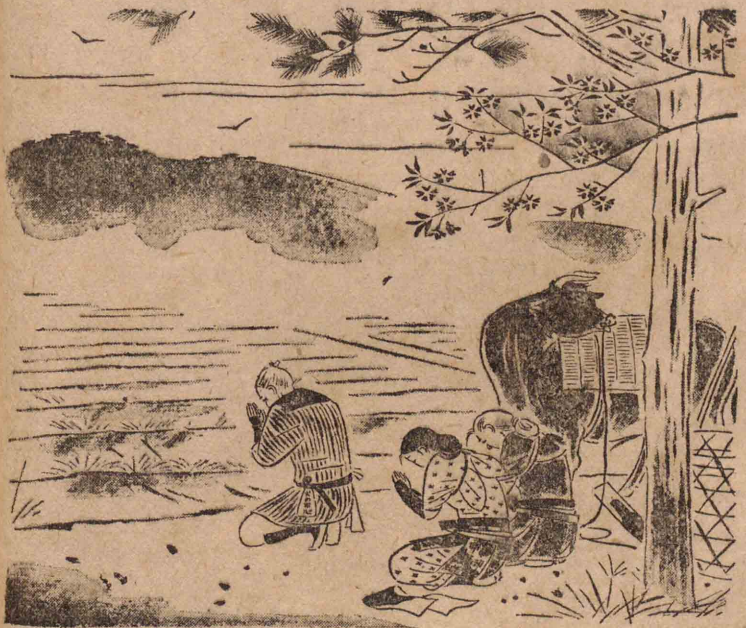
とおよみになり、使節の來朝を國威のかがやきとして、お喜びにな



りました。

東山天皇の御代には、日でりが
續いて、賀茂川の水もとぼしくな
り、あたりの百姓は、農作に困つた
ことがあります。天皇は、これを
聞き召し、わざわざ御所の引水
おとめになつて、少しでも田がう
るほふやうに、おはからひになり
ました。百姓たちは、御恵みに感
激して、毎朝仕事を始めるに先だ
ち、はるかに皇居を伏し拜んだと
いふことであります。

御恵みに感激して



第五十代 櫻町天皇も、つねに民草の上をお思ひになつて、

思ふにはまかせぬ世にもいかでかは

なべての民のころやすめむ

とおよみになり、第六十代桃園天皇は、

神代より世々にかはらで君と臣の

みちすなほなる國はわが國

とおよみになつて、君臣の分、わが國がらの尊さを、はつきりとお示
しになりました。やがて第九十代光格天皇の天明年間には、數年にわ
たる大飢饉たいきげんがあり、食にうゑてさまよひ歩く民草が、年とともにふ
えました。天皇は、深く御心配になつて、
たみ草に露のなさけをかけよかし

世をもまもりの國のつかさは



とおよみになり、民草の苦しみを救ふやう、國々の大名をおさとしになりました。

幕府が、とかく目先のことばかり考へて、その本分を忘れ、勝手なふるまひをしがちであるにかかはらず、いつもかうした御恵みをたまはつてゐることは、まことにおそれ多いきはみであります。

二 名藩主

諸大名の中には、朝廷の深い御恵みのもとに、「國のつかさ」であることに目ざめて、それぞれ領内の民をいたはり、政治にはげむものが、少くありませんでした。いつぱんに、大名が自分の領地を治める仕組みを、藩政といひます。

家光の代が終るころまで、幕府の取りしまりが特にきびしく、大名の異動もはげしかつたため、藩政は、あまり振るひませんでした。しかし、やがて世の中が太平になり、取りしまりもゆるやかになると、諸大名は、おちついて政治にはげむことができ、やうになりました。家光のころ、すでに岡山藩主池田光政や會津藩主保科正之のやうな名藩主が現れ、學問や産業を興して、りつぱな治績をのこしてゐます。ことに正之は、あつく神をうやまひ、正しい學問を興して、會津藩の美風の基を開きました。しかし、いつぱんに藩政が振るふやうになるのは、もう少したつてからのことでもあります。

家繼のあとをついで、將軍に任じられた吉宗も、大名の出身で、いはば、藩を治めた腕前を、將軍の政治に發揮した人であります。吉宗は、親藩の紀伊家に、末子として生まれ、十四歳の時、ある小藩の主

となりました。しもじもの生活を思ひやつて、自分も質素な生活を續け、産業を興して、よく領内を治めました。つねに皇室をうやまひ、話が朝廷の御事に及ぶと、かならず、あずまひを正したといふことであります。二人の兄が相ついで病死しましたので、紀伊家へ歸つて藩主となり、よく大藩を治めました。やがて、家繼が幼少でなくなり、世つぎがないため、迎へられて徳川の本家をつぐことになりました。

中御門天皇の享保元年、吉宗が將軍に任じられると、まづ、儉約をすすめ、武事をはげまして、武士の氣風をひきしめました。また、大岡忠相を江戸の町奉行に用ひるなど、裁判を公平にし、貧民のために病院などを建てて、人々をいたはりました。特に力を注いだのは、産業の方面でありました。農業が産業の本であることを考へ、

吉宗が農業をはげます



諸國の土地を調べて水利をよくし、新田の開墾をすすめて、ひたすら米の増收をはかりました。かうして、吉宗一代の間に、耕地の面積も米の産額も、目だつてふえましたので、人々は、吉宗を米將軍とたたへました。これまでも、幕府や大名の努力によつて、開墾はかなりに進められたのですが、吉宗の代になつて、全國の耕地面積は、およそ三百萬町歩に達し、秀吉の時に比べて、約二倍となりました。



吉宗はまた、さつまいもの栽培を諸國にひろめて、飢饉に備へるとともに、朝鮮にんじんやさとうきびの移植を試みて、金銀が海外に流出することを防ぎました。諸大名も、吉宗にならつて、それぞれ産業の發達をはかり、國々の特色ある名産が、しだいに増すやうになりました。

このやうに、吉宗は、よいと思つたことをよく實行しました。幕府の財政を整へるために、參勤交代のおきてを、一時ゆるめたことさへあります。また、産業を發達させるには、ヨーロッパの學問を取り入れることも必要であると考へ、天主教に關係のない洋書にかぎつて、讀むことを許しました。特に、青木昆陽を長崎へやつて、オランダ語を學び、天文學を研究して、農業に必要な曆の改良を企てさせました。だいたい、紀元二千四百年ころのことです。

わが國民は、昔から、いろいろ工夫することですぐれ、元祿のころには、關孝和といふ偉大な算數の學者も出てゐます。吉宗が洋書の禁をゆるめると、理數の學問に對する國民の研究熱は、一だんと高まつて行きました。やがて、第七代後櫻町天皇、第八代後桃園天皇の御代のころから、杉田玄白や平賀源内らが現れ、醫學や電氣學の發達に、力を注ぎました。源内の作つた發電機には、オランダ人も、目をみはつて驚いたといひます。更に光格天皇の御代に



伊能忠敬の測量

は、林子平や伊能忠敬らが出て、地理の學問を興しました。子平は、海國兵談といふ本をあらはして、海防の必要を説き、忠敬は、きはめて正確な日本地圖を、みごとに作りあげました。佐藤信淵や二宮尊徳が、農業の學問を進めたのも、だいたいこのころのことです。これらの學者は、いづれも勞苦を積んで、國のため世のため、學問にはげんだのであります。

光格天皇の御代に、幕府では、家齊が將軍に任じられ、松平定信が老中になつて、政治をたすけました。吉宗が將軍職を退いてから、約四十年のちのこととて、當時、幕府の政治も、人々の氣風も、だいぶゆるんでゐました。定信は、吉宗の孫に當る人で、松平氏について奥州白河の城主となり、よく領内を治めて、人々にしたはれました。やがて老中を命じられると、儉約をすすめたり、文武をはげました。

り、もつばら吉宗の方針にならひ、眞心こめて政治にはげみました。節約させて残つた米や錢を、飢饉に備へさせたのも、治績の一つです。かうして、幕府の政治も、人々の氣分も、ひとまづひきしまりました。

吉宗や定信が、りつばな政治をすることのできたのは、皇室を尊び、藩主であつたころの苦勞を忘れず、眞心をこめて事に當つたからです。このころ國々でも、すぐれた藩主が、續々と現れました。中でも、米澤藩主上杉治憲と、熊本藩主細川重賢とは、いづれも、學問をすすめ、産業を興し、人々をいたはつて、東西に名藩主のほまれを残しました。

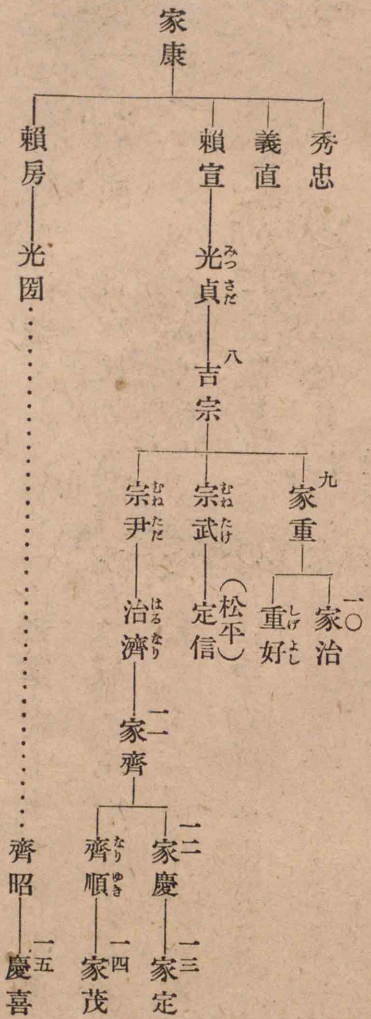
ところで、このころわが國は、もう國內の太平にばかり安んじてゐることができなくなりました。海外の形勢が、すっかり變つて、

定信が海岸を巡視する



イギリス・フランス・ロシアなどの強國が、しきりに東亞を侵略し、わが國へもだんだんせまつて來たのです。子平が海國兵談の中に「江戸の日本橋とヨーロッパとは、水でつながつてゐる。相手が攻めようとなさへ思へば、どこへでも上陸することが出来る。」と述べて、國民を戒めたのは、寛政三年(紀元二千四百五十一年)のことでした。しかも翌年、果してロシアの船が、根室へ來て通商を求めました。

さすがの定信も、大いに驚いて、沿海諸國の大名に海防を命じるとともに、五年には、自分で伊豆相模などの海岸を巡視しました。まもなく、定信が職を退いて、家齊が自分で政治をとりました。しかも家齊は、この大事な時に氣がゆるんで、せいたくな生活にふけり、幕府の勢は、しだいに衰へるやうになりました。



三 國學

萬一、諸外國が日本に攻め寄せた場合、何よりも大切なことは、國民が尊い國がらをよくわきまへ、心を一つにして、敵に當ることとあります。それには、國民が國のため、正しい學問をして、大和心をしつかりと持つてゐなければなりません。かうした正しい學問を進めた人に、徳川光圀や本居宣長らがありました。

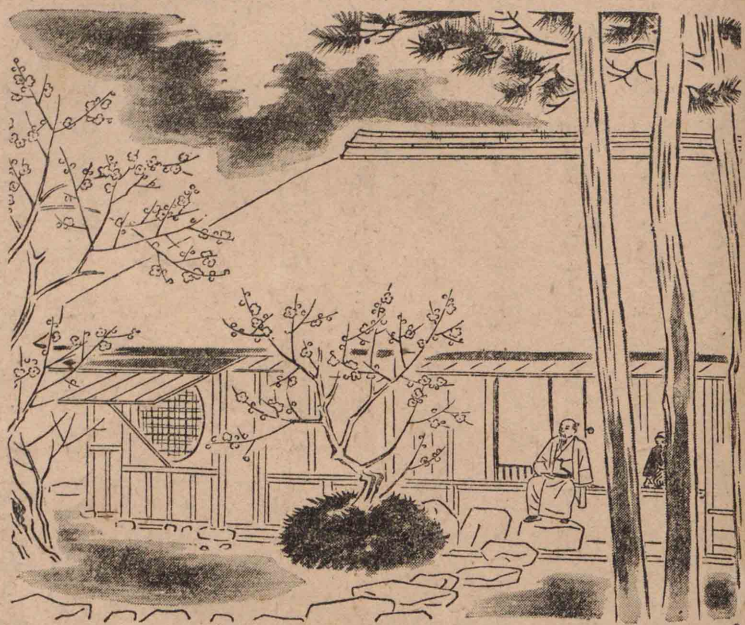
皇室の御奨励によつて、學問は、まづ京都を中心に發達しました。家康も、政治をするには、學問が必要であると考へ、學者を招いたり古書を出版させたりしましたので、學問は、江戸でも、しだいに盛んになつて行きました。ことに綱吉は、江戸の湯島に幕府の學問所を開き、熱心に學問を奨励しました。かうして、元祿のころには、上

方にも江戸にも、名高い學者が續々と現れました。

諸大名の中にも、學者を招き學校を興して、藩の教育につとめるものが、年とともに多くなりました。わけても、親藩の水戸藩主、徳川光圀は、皇室を尊び、神をうやまひ、日本のため、正しい學問をうち立てることにつとめました。光圀が生まれたのは、ちやうど濱田彌兵衛が、臺灣でオランダ人をこらしめたころのこととあります。光圀は、家康の孫に當ります。しかも、幕府がわがままであることを、いつも心配してゐました。毎年元旦には、禮服に身を正して、はるかに皇居を伏し拜み、また、つねに家臣を戒めて、「われわれの主君は、天皇であらせられる。將軍は、徳川の主であるに過ぎない。この點をまちがへてはならないぞ。」といひきかせました。それといふのも、幕府の威勢が強いので、武士たちの中には、ややもする

と、皇室の御恵みを忘れ奉るものがあつたからです。武士がさうです。光圀は、深くこれをなげき、北畠親房のことをしのぶにつけても、正しい國史の本をあらはし、尊い國がらを明らかにして、人々をみちびかなければならないと考へました。

まづ、京都の學者山崎闇齋の門人や、多くのすぐれた學者を招き、第一百十代後西天皇の御代に、いよいよ國史の編纂にかかりました。光圀自身も、古書を調べ、編纂を統べ、特に、正成始め吉野の忠臣の事蹟を明らかにしようと、つとめました。その國史は、光圀一代の間に、主な部分はできましたが、何ぶんにも、大がかりな計畫なので、その後、子孫代々、これを受けつぎ、二百五十年といふ長い年月を経て、明治三十九年に、やつと完成しました。これが、名高い大日本史であ



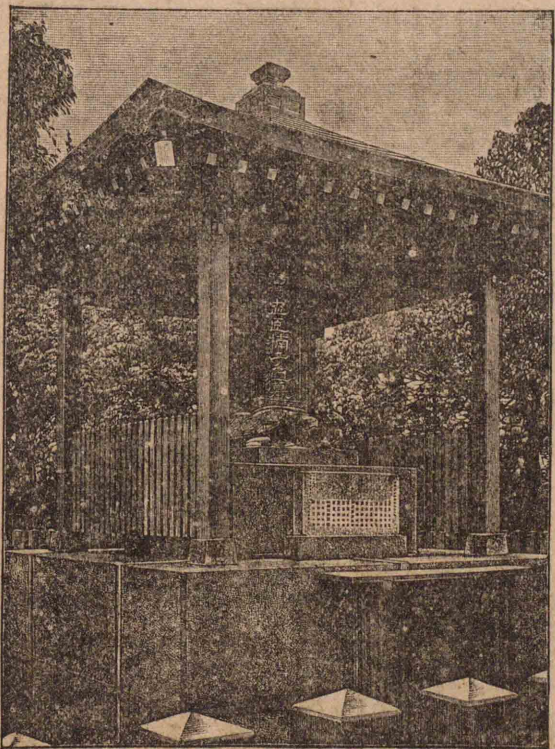
梅の花のやうにけだかく

り、この事業が進むにつれて、水戸藩には、大義名分を説く學者が次に現れ、その學問は、世に水戸學といはれて、國民の尊皇精神をひき起す大きな力となりました。光圀は、やがて隱居し、元祿年間、西山に、きはめて質素な住居を構へて、梅の花のやうな、けだかい生活を送りました。しかも、たゆみなく大日本史の編纂を進め、また正成の碑を湊川に建て、みづから筆をとつて、これに「嗚呼忠臣楠子



之墓」としるし、その忠誠を世にあらはしました。ゆきかふ人々は、この碑を仰いで、正成の忠誠を心に深く刻みました。また、吉野の忠臣の事蹟をたたへた太平記も、このころ盛んに愛讀され、尊皇の精神は、しだいに國民を目ざめさせるやうになりました。

學者の中には、わが國の古書を研究し、特に、古い國語をくはしく調べて、大和心をはつきりさせる必要があるといふ考へから、萬葉集や古事記を研究するものが、次々に現れて來



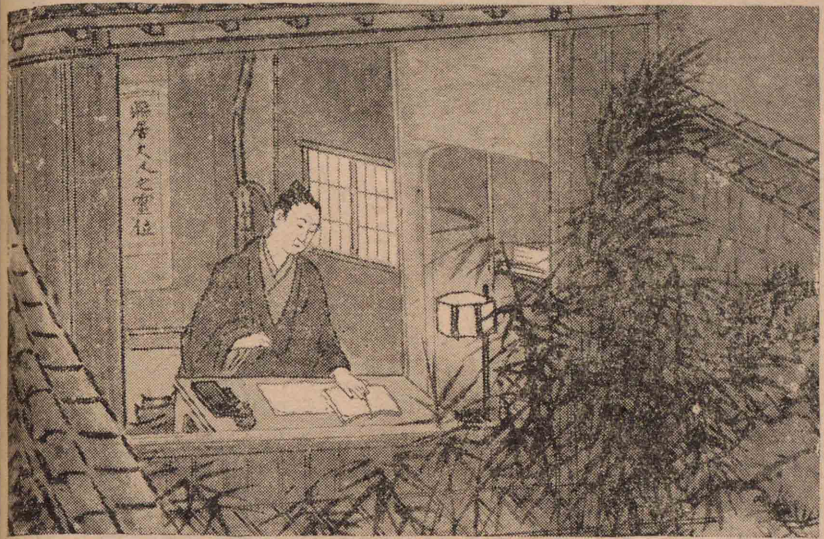
楠公の碑

ました。かうして興つた新しい學問を、國學といひます。

光圀は、早くこれに目をつけ、大阪の僧契沖が、古いことばにくはしいと聞いて、これに萬葉集の解釋を頼みました。その後、京都の荷田春滿、遠江の賀茂眞淵、伊勢の本居宣長らが、次々に出て、ますます國學の研究を進めました。宣長は、寛政のころの人で、いはば、國學を大成した學者であります。

宣長は、學者の中に、支那を尊びわが國をいやしむものが多いのをなげき、日本の國がらが、萬國にすぐれてゐることを明らかにするため、多くの本をあらはしました。中でも名高い古事記傳は、古事記をくはしく研究したもので、宣長は、これを作りあげるのに、三十餘年の長い年月を費しました。質素な四疊半の書齋に閉ちこもつて、夜となく書となく著述にはげみ、つかれると、部屋のスみに





かけてある鈴すずをならして心を慰
めながら、また筆をとつたといふ
ことです。その書齋を鈴の屋と
長いふのは、かうしたことから、つけ
宣のりられた名であります。
の 宣長は、櫻の花を好み、みづから
屋やゑがいた肖像せうざう畫がに、
の 敷島の大和心を人とはば
鈴 朝日にほふ山櫻花
と書きそへてゐますが、この歌は、
わが國民の精神を、いかにもよく
よみあらはしてをり、廣く世に傳

へられ、もてはやされてゐる名歌です。

宣長の門人は、全國にわたつて五百人に近く、いづれも師の志を
ついで、その説を世にひろめました。中でも、出羽での平田篤胤あつたは、幕
府をはばかりることなく、盛んに尊皇の大義を説き、人々に深い感銘かんめい
を與へました。

篤胤と同じころの學者頼山陽らいさんやうは、二十年の心血こころちゆうを注いで、日本外
史しといふ本をあらはし、特に楠木くすのき氏うぢや新田にった氏うぢらの忠誠をたたへま
した。尊皇の熱情にみちあふれたその文章は、人々を深く感動さ
せました。

かうした學者の研究や主張しゆちやうが、しだいに世の中にひろまるとと
もに、一方尊皇の運動は、早くも、桃園天皇の御代に起りました。す
なはち、京都に竹内式部たけのうちのしきぶ、江戸に山縣大貳やまがたのだいにらが現れ、ひそかに尊皇の





彦九郎が御所を伏し拜む

まはつて、大義名分を説きました。途中京都を通る時は、かならず

大義を説いて幕府を非難し、重い刑罰に處せられました。しかし、ひとたびもえあがつた火は、幕府の力でおさへきることができないのです。やがて光格天皇の御代には、高山彦九郎・蒲生君平が出て、ともに、その一生を尊皇の大事にささげました。彦九郎は、上野に生まれ、十三歳の時、太平記を読んで、尊皇の熱意にもえたちました。大きくなるにつれて、忠誠の心はいよいよ深く、諸國を

御所を伏し拜み、感涙をおさへることができませんでした。のち、筑後の久留米で、時勢をなげいて自害しましたが、息をひきとるまで、かたちを正して、はるかに皇居を拜んでゐたといふことです。君平は、下野の人で、各地の御陵を巡拜し、第一百二十代仁孝天皇の御代に、山陵志といふ本をあらはして、朝廷に奉り、また幕府にも、さし出しました。山陵志が出て、今まで世に知られてゐなかつた御陵も明らかになり、荒れてゐた御陵は、のちに、だんだん御修理申



君平が御陵を巡拜する

しあげるやうになりました。
かうした人々の努力によつて、國民は、わが國がらの尊さを知り、外國の船が日本をうかがひ始めた寛政のころから、尊皇の精神が、しだいに高まつて行きました。明治の御代、朝廷では、尊皇の志の厚かつた、これらの人々に對し、その功をおほめになつて、それぞれ位をお授けになりました。

第十一 うつりゆく世

一 海防

幕府が國を鎖して、およそ百五十年の間に、海外の形勢が、すつかり變りました。まづ、オランダが盛んになり、一時は、世界中の貿易を獨占するのではないかと思はれるほどでしたが、あまりに利益をむさぼつて、各地の人々からきらはれ、かつ海軍が振るはないため、しだいに衰へてしまひました。これに代つて榮えたのが、イギリスであります。

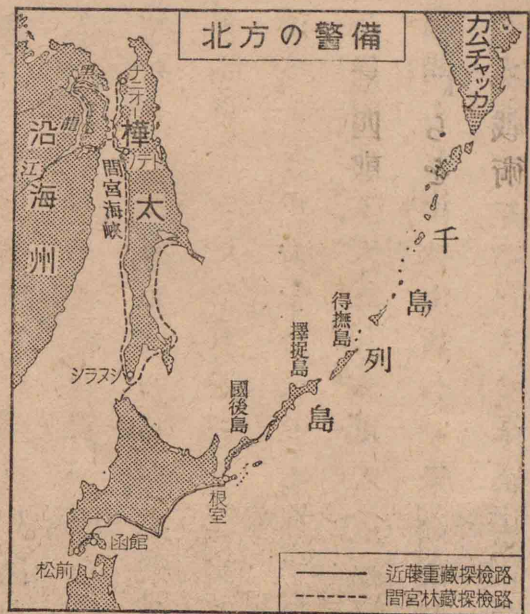
イギリスは、東山天皇の御代、富士に寶永山ができた年に、本國が

一だんと大きくなり、勢に乗じて、インドの侵略を進めました。また、北アメリカから、オランダやフランスの勢力を追ひ拂つて、その産物や貿易の利益を占め、やがて、世界でいちばんゆたかな國になりました。ところで、イギリスは、北アメリカへ渡つた移民に對し、いろいろむごい仕打ちをしましたので、それら移民は、つひに反旗をひるがへし、本國から獨立して、新たにアメリカ合衆國といふ國を建てました。光格天皇の天明年間、今から百六十年ばかり前のことでもあります。

一方ロシアは、わが天正のころから、シベリヤの侵略を始めました。どしどしと東へ手をのばし、やがて滿洲の北境にせまりました。そこから更に南へくだつて、どこかに不凍港を得ようとするのです。そのころ、滿洲や支那を治めてゐた清は、兵を出して

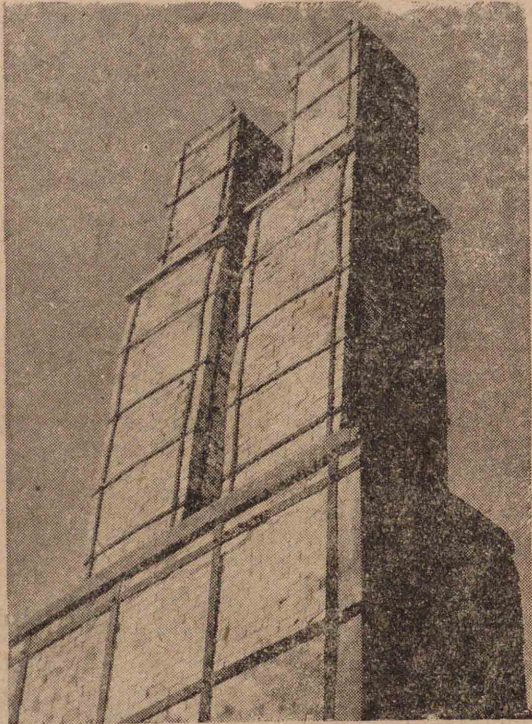
たびたびこれを退け、條約を結んで、外興安嶺を國境と定めました。ロシアは、仕方なく進路を東へ轉じて、カムチャツカ半島を占領しました。これもちやうど、わが國では、寶永山のできた年に當ります。ここを根城にして、なほ東の方、アリューシャン列島からアラスカを侵略し、更に南下して、千島列島をうかがひ、イルクーツクに日本語學校を設置するなど、わが國を侵略する準備を整へました。寛政四年、ロシアの使節が根室へ來たのは、かうした野心の現れであります。

幕府は北方が危いと知つて、急いで海防の手配りをし、近藤重藏に蝦夷地を巡視させ、高田屋嘉兵衛に擇捉島で漁場を開かせ、また伊能忠敬に蝦夷地の測量を命じました。更に、箱館奉行を置き、南部津輕の二藩にも、北方の警備を命じました。やがて文化元年、ま



松前奉行と改め、仙臺會津二藩の兵を警備に加へて、北方の守りを固めました。間宮林藏が、幕府の命を受けて、樺太や沿海州を探検したのも、この時のこととあります。折も折、イギリスの軍艦が、長崎港をおそつて亂暴をはたらき、時

の長崎奉行松平康英が、責任を感じて切腹するさわぎが起りました。その後英艦は、しきりにわが近海に出没し、仁孝天皇の文政元年に、シンガポールを占領してから、その亂暴はいよいよ激しくなりました。國民は、大いにこれを憤り、攘夷の氣勢が、年とともに高まつて行きました。幕府も、つひに決心して、文政八年、わが近海に近よる船は、見つけしだい、これを打ち拂へ。」との命令をください。高島四郎太夫、江川太郎左衛門らを用ひて、新しい兵器や戦術を研究させ、軍備



葦山の反射爐

の充實をはかりました。

諸大名の中でも、水戸の徳川齊昭を始め、薩摩の島津齊彬、佐賀の鍋島直正、福井、宇和島、津の諸藩主など、盛んに攘夷をとなへ、かつ海防のことにつとめました。わけても齊昭は、光圀の志をついで、尊皇の心に厚く、弘道館といふ學校を建てて、大いに文武の道をはげまし、盛んに大砲を造つて、攘夷の準備を整へました。

ところが、このころ、幕府も大名も、いつぱんに費用がとぼしく、十分な軍備を整へることができません。また、長い間の太平になれて、人々の心は、なかなか引きしまらず、一時あがつた攘夷の氣勢も、とかくにぶりがちです。その上、天保年間には、全國に飢饉があり、大鹽平八郎が亂を起し、老中水野忠邦の政治改革も評判がよくないといふ有様です。しぜん、渡邊崋山や高野長英のやうに、開港を

となへるものも現れました。これらの人々は、洋學をまなんで、ひととほり海外の形勢を知つてゐましたので、しばらく攘夷をひかへて通商を許し、まづ國力を養ふことが大切であると考へたのです。幕府は、人々の心をまどはすものとして、これを罰しました。

やがて天保十一年、ちやうど紀元二千五百年に、清と英國との間に阿片戦争が起り、清のやぶれたことが、わが國へ傳はりました。

幕府は驚いて、天保十三年前に出した外國船打ち拂ひの命令をゆるめました。英國は、清と條約を結んで、香港を取り、東亞を侵略する根城を、更に加へたのであります。この形勢を見て、佐久間象山や高島四郎太夫は、國防充實の必要をとなへ、佐藤信淵も、國力を養ひ、進んで南方に根城を構へ、清と結んで西洋諸國の侵略を防がなければならぬと説きました。それに、弘化元年には、オランダが

使節を來朝させ、清のやぶれたやうすをくはしく述べて、しきりに開國をすすめますし、米國も東亞へ手をのばし、清と通商條約を結ぶ有様です。幕府は、文化文政から天保にかけての四十年の間に、すつかり衰へました。オランダの申し出をこばんで、海防につと



めながらも、鎖國か開港かに迷ひ始めました。孝明天皇に、御稜威のもと、攘夷の實行を説く尊皇攘夷論が、水戸藩を中心に、

猛然と起りました。幕府のあいまいな態度を責める聲が、日ごとに高まつて行きます。かうした中に、弘化三年、孝明天皇が、御年十六歳で、御位をおつぎになつたのであります。

二 尊皇攘夷

孝明天皇御製

あさゆふに民やすかれと思ふ身の

こゝろにかかる異國のふね

かしこくも孝明天皇は、國初以來かつてない困難な時勢に際し、たじろぐ幕府をはげまし、ふみ迷ふ民草をみちびいて、ひたすら難局の打開に、おつとめになりました。特に、外交の事については、日

夜御心を用ひさせられ、わが國威を傷つけないやうにと、つねに幕府をおさとしになりました。

天皇が御位をおつぎになつたころ、わが港灣をうかがふ外夷には、新たにアメリカ合衆國が加りました。アメリカは、獨立後西方へ領土をひろめ、嘉永元年には、つひに太平洋岸に達しました。しかも、太平洋における活動の基地をわが國に求め、嘉永六年、ペリーを使節として、通商をせまつて來

黒船の來航



ました。

ペリーは、戦艦四隻を率ゐ、途中小笠原諸島や琉球列島の占領をもくろみながら、ひとまづ浦賀に錨を投じ、盛んに空砲を放つて人々をおびやかす。幕府に國書をさし出しました。その夜、浦賀の山々、海岸一たいに、かがり火がもえさかり、夜通し警鐘が鳴り響いて、ものものしい光景を呈しました。幕府は、事重大と見て、返答を翌年に延し、やつとペリーをかへしたのち、ただちにこの事を朝廷に奏上しました。

一方幕府は、諸大名の意見をききました。が、攘夷論が盛んであるのにかんがみ、攘夷の方針を立て、ひたすら海防につとめ、鎖國以來堅く禁じてゐた大船の建造も、この際に許すことにしました。ペリーが來た翌月、ロシヤの使節もまた長崎へ來て、通商を求めまし

たが、これも後日を約して、引き取らせました。

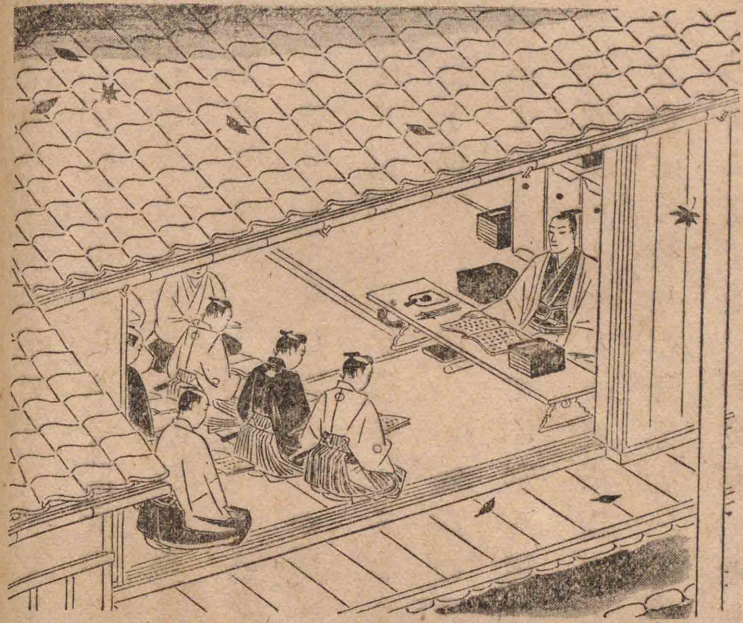
早くも年が改つて、安政元年となり、ペリーは、ふたたび神奈川沖へ来て、返答を求めました。ところが幕府は、海防に自信がないので、攘夷の決心もくじけ、とりあへず和親條約を結び、下田・函館の二港を開いて、燃料や食料などの供給を約束しました。ついで、イギリス・ロシア・オランダとも、ほぼ同様の條約を結び、ロシアとの國境問題は、千島を分有、樺太を共有と定めました。

安政三年、和親條約に基づき、米人ハリスが、總領事として着任し、やがて、將軍家定に調して、世界の形勢を説き、たくみに通商をすすめました。幕府もつひにこれを認め、通商條約の草案を作つて、安政五年、勅許を仰ぎました。ところで、諸藩の間には、かねて攘夷の氣勢が強く、幕府が和親條約を結んだことさへ、非難の的になつて

ある際です。天皇は、國民の意見がまちまちであるのを、たいそう御心配になり、なほよく諸大名との評定をつくすやうにと、おさとしになりました。幕府は、進退きはまり、彦根藩主井伊直弼を大老に擧げて、この難局に當らせました。

このころ、英佛の聯合軍が、清を破つて天津の砲臺をおとし、いれ勝ちに乗じて、わが國をおそふとのうはさが傳はりました。ハリスは、この形勢を説いて、條約の調印をせまります。直弼は、事を長引かせてはかへつて不利と思ひ、つひに勅許を待たずに、安政の假條約に調印し、ついで、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも、ほぼ同様の條約を結びました。しかも、この條約は、函館・神奈川・長崎・新潟・兵庫の五港を開いて、貿易を許したことのほかに、わが國にとつて、ずるぶん不利な點の少くないものでありました。

松下村塾の人々



徳川齊昭らの大名や、吉田松陰らの志士は、幕府が國威を傷つけたことをなげきもし、また憤りもしました。その上、將軍家の世嗣問題もからまつて、直弼を非難する聲は、いよいよ激しくなりました。そこで直弼は、幕府に反對する公家・大名や、松陰を始め橋本左内・梅田雲濱らの志士數十人をきびしく罰して、このさわぎをしづめようとしました。

尊皇の心にもえる志士たちは、

幕府の命によつて、次々にいたましい最期をとげました。

身はたとひ武藏の野邊にくちぬとも

とどめおかまし大和だましひ

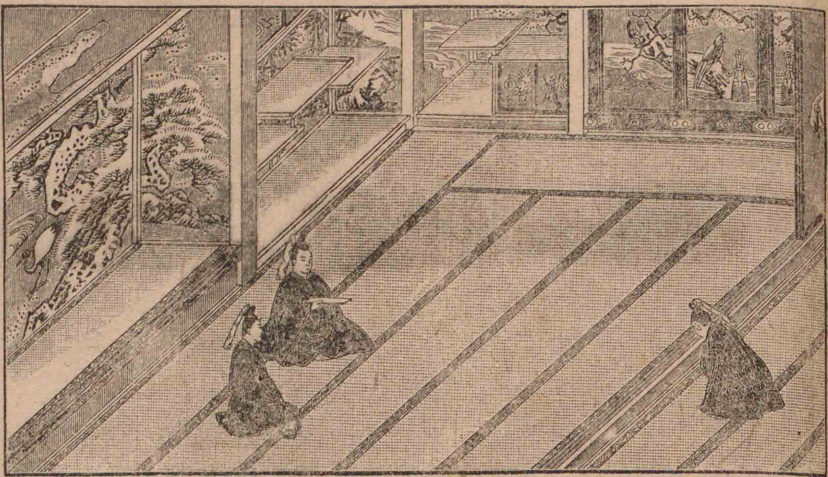
松陰は、かう歌つて、國家の前途をうれながら、まだ三十歳といふ若さで、惜しくもたふれました。しかし、松下村塾で育つた人たちは、よく松陰の志を受けつぎ、また水戸の弘道館からも、續々尊皇の志士が現れました。

かうして直弼は、攻撃の矢面に立ち、萬延元年三月三日、つひに水戸の浪士におそはれて、櫻田門外でたふれました。昨日は心ならずも志士を斬り、今日は思ひがけなく志士に刺される。わが國にとつてのよくよくの難局でありました。ともあれ、直弼の死によつて、幕府はその威嚴を失ひ、尊皇攘夷をとなへる人々は、やがて幕

府を倒さうと考へるやうになりました。
 幕府は、朝廷におすがりして、世の信用をとりもどさうとつとめ
 ましたが、これがかへつて志士たちを憤らせました。その上、諸外
 國の居留民は、わうへいにいばります。あれやこれやで、攘夷の氣
 勢は、わき立つばかりです。

萬延元年、水戸の齊昭がなくなると、尊皇攘夷の中心は、東から西
 へ移つて、薩摩・長門・土佐諸藩の志士が續々上洛し、京都は、急に活氣
 づいて來ました。文久二年には、薩摩の島津久光が、大兵を率ゐて
 入京します。やがて、長門・土佐を始め西國の諸藩主が、次々に上洛
 する有様でした。

おそれ多くも孝明天皇は、何とかして幕府に政治を改めさせ、國
 民の心を一つにしたいものとお考へになり、西國の諸藩も、幕府が



實美が勅を家茂に傳へる

人材を用ひて、失政をつぐなふやうに
 と望みました。そこで天皇は、まづ勅
 使大原重徳を江戸へおくだしになつ
 て、政治の立て直しをお命じになり、更
 に勅使三條實美を以て、攘夷の決行を
 仰せつけになりました。將軍家茂は、
 つつしんで仰せに従ひ、徳川齊昭の子
 一橋慶喜らを幕府に入れて政治を改
 め、松平容保に京都の守護を命じ、文久
 三年、みづから上洛して、攘夷の日どり
 などを奏上しました。

ところが、このころ長州藩と薩摩會

津などの諸藩との間に、攘夷に對する意見のへだたりから、不和が起りました。朝廷でも、攘夷を一時お見合はせになりましたので、攘夷に熱心な長州藩は、すっかり面目を失ひ、志士はあせつて、大和や但馬で、尊皇攘夷の旗あげをする有様でした。

元治元年、長州の藩兵が、京都で薩摩會津などの藩兵と衝突し、勢あまつて、宮門ををかしました。朝廷では、幕府に長州をお討たせになりましたが、藩主らが、ひたすら罪をおわび申しあげましたので、事はおだやかに、をさまりました。やがて朝廷では、内外の形勢に照らして、慶應元年、通商條約を勅許あらせられ、薩長の間も、土佐の坂本龍馬らの努力によつて、もと通り仲よくなりました。

ところで、幕府は、力もないのに、あくまで長州藩をこらしめようとして、慶應二年、長州の再征を企てましたが、かへつてさんざんにやぶれ、この形勢不利のうちに、家茂は、大阪城でなくなりました。朝廷では、戦を中止するやうお命じになり、やがて慶喜を征夷大將軍にお任じになりました。

慶應二年の暮れ近く、孝明天皇は、御病のため、御年三十六歳で、おかくれになりました。御代は、弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應にわたつて二十一年、内外多事の折から、片時も御心をおやすめになるおひまもありませんでした。かしこくも、皇祖皇宗の神靈に、ひたすら國難を除くことをお祈りになり、萬民をいつくしんで、つねに、その進むべき方向をお示しになりました。朝廷の御威光は、年とともに高まり、諸政一新の大御業も、まさに成らうとする時、には、かに、おかくれになつたのであります。まことに、おそれ多くもまた、悲しいきはみでありました。

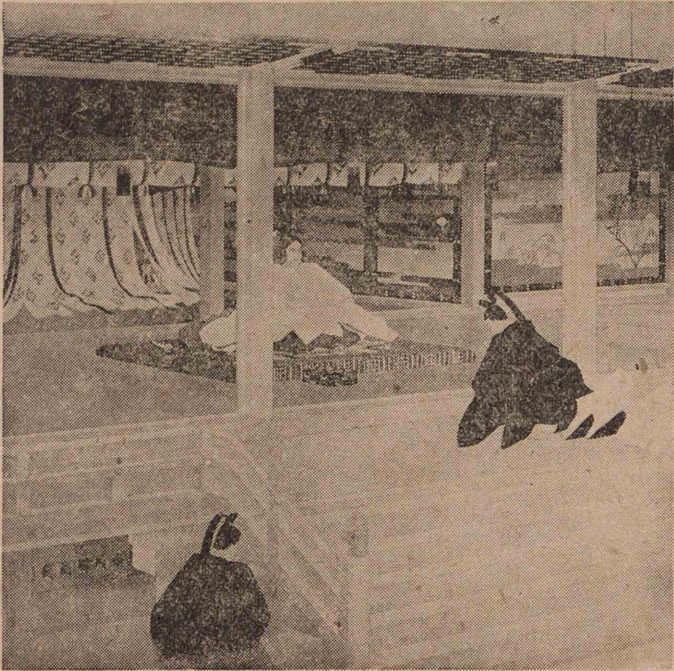
第十二のびゆく日本

一 明治の維新

孝明天皇がおかれになり、第百二十代明治天皇が御位をおつぎになりました。

天皇は、嘉永五年の秋深く、菊花の香りも清らかなよき日に、めでたく御降誕になりました。まだ御幼少の時、孝明天皇に従つて、御所の日の御門で、藩兵の演習をごらんになつたことがあります。百雷の一時に落ちるやうな大砲の響きに、人々はただ身をふるはせてゐましたが、天皇は、御顔の色うるはしく、御熱心にごらんにな

つたといふことであります。御位をおつぎになつたのは、御年十



なるに おつぎに 御位を

六歳の時でありました。

走馬燈のやうな、めまぐ

るしい世の移り變りも、慶

應三年に入つて、しだいに

おちついて來ました。衰

へはてた幕府には、もう國

事をさばく力がありません。

そこで、三條實美、岩倉

具視らの公家は、薩摩藩士

西郷隆盛、大久保利通、長州

藩士木戸孝允らとともに、幕府を倒さうとはかりました。土佐の

前藩主山内豊信は、このなりゆきを心配し、家臣後藤象二郎を將軍慶喜のもとへつかはして、大政の奉還をすすめました。

慶喜は、齊昭の志をついで、もともと尊皇の心に厚く、またよく時勢を見抜いてゐましたので、こころよく、豊信のすすめに従ひました。そこで、一族家臣諸藩主の意見をまとめ、参内して大政の奉還を奏請するとともに、積りに積つた幕府の失政を、深くおわび申しあげました。天皇は、その眞心をおほめになり、ただちに申し出をおきき入れになりました。時に紀元二千五百二十七年、慶應三年で、江戸に幕府が開かれてから、およそ二百六十年の年月が過ぎ去りました。前後七百年近く續いた武家政治も、ここにまつたく終りをつげたのであります。

天皇は、その年の十二月、神武天皇の御創業の昔にたちかへり、御

みづから、いつさいの政治をお統べになる旨を、仰せ出されました。まづ、攝政關白征夷大將軍などの官職をおやめになり、新たに總裁・議定・參與の三職をお定めになつて、有栖川宮熾仁親王に總裁を、皇族の方々、維新の功臣に、議定あるひは參與をお命じになり、政治をおたすけさせになりました。これを王政復古と申しあげてゐます。やがて各國の使節をお召しになり、王政復古の旨をつけ、開國和親の方針をお示しになりました。

天皇は、諸政を一新し、國力を充實して、皇威を世界にかがやかす思し召しから、まづ、政治の根本方針をお立てになりました。明治元年三月、文武百官を率ゐて紫宸殿に出御、天地の神々を祭つて、この御方針をお誓ひになり、更に、これを國民にお示しになりました。すなはち、

一、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ。
 一、上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フヘシ。
 一、官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ。
 一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ。

の五箇條がそれで、世に、これを五箇條の御誓文と申しあげてゐます。文武百官は、しみじみ任務の重大なことを感じ、決死の覺悟で職務にはげむことを、お誓ひ申しあげました。ここに、新政の基はいよいよ定まり、國民は、聖恩に感泣して、新しい日本のかどで、心から喜び合ひました。

やがて天皇は、即位の禮を紫宸殿でお舉げになりました。御儀

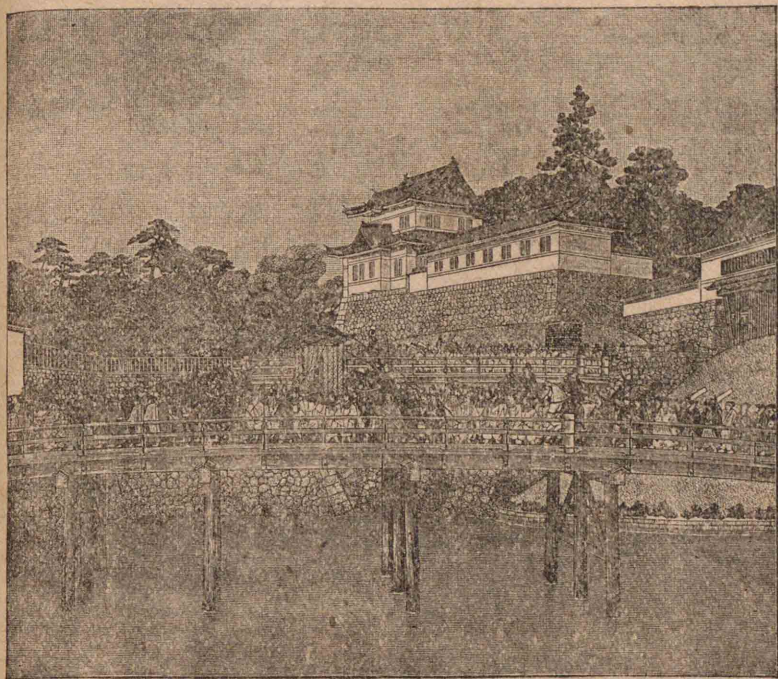
式もまた古にたちかへつて、莊嚴であり盛大でありましたが、承明門内の中央には、直徑三尺六寸餘の地球儀が、御代の榮えをことほぐやうに、飾られてゐました。この地球儀は、天皇のお生まれになつた嘉永五年に、徳川齊昭が奉つたものであります。ついで、慶應四年を明治元年とお改めになり、一世一元の制をお立てになりました。

天皇はまた、人心を新たにす御心から、遷都のことをお思ひ立ちになり、江戸を東京と改めて、まづ行幸になりました。鹵簿はし



維新のしるし

東京遷都



づしづと、東海道をお進みになり、かしこくも、鳳輦を各地にとどめになつて、民草の生業にいそしむ有様をごらんになりました。沿道の民は、この御盛儀と御恵みを拜して、ただ感涙にむせぶばかりでありました。やがて京都へ還幸になり、皇后をお立てになつて、翌二年、ふたび東京へお向かひになりました。まづ、伊勢の神宮に御親拜のち、日を重ねて、東京へお

着きになり、ながくここに、おとどまりになりました。しかも後年、即位の禮と大嘗祭とは、特に京都で行ふことにお定めになり、千餘年の古都のゆかりを、後世にお傳へになつたのであります。

かうして日本は、昔ながらの正しい姿にたちかへつて、島國から海國への一大發展を示しました。しかし、何ぶんにも大きな變化ですから、この間、國內には、なほ色々のもつれ合ひが續きました。

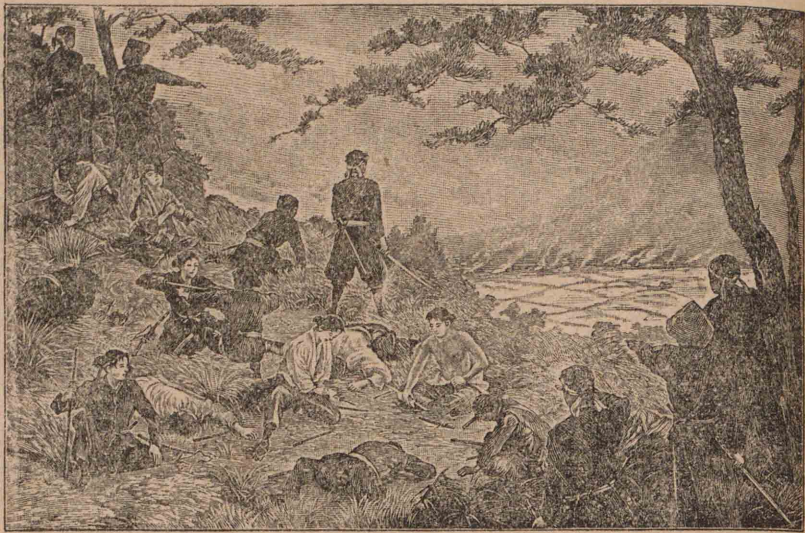
さきに、慶喜が大政を奉還したのち、朝廷では、諸政一新の思し召しから、慶喜に官職や幕府の領地を返上するやう、お命じになりました。ところで、幕府の舊臣や會津、桑名などの諸藩は、慶喜が新政府の列に加らないのを見て、もつぱら薩長二藩の取り計らひであらうと思ひこみ、明治元年の正月から一年半ばかり、次々にさわぎを起しました。すなはち、鳥羽・伏見の戦から、さわぎは、やがて江戸

に移り、更に奥羽から函館へと飛火しました。朝廷では、小松宮彰仁親王を征討大將軍に任じて、鳥羽伏見の戦をおしづめになり、有栖川宮熾仁親王を東征大總督に任じ、西郷隆盛らを参謀として、江戸及び東北のさわぎを御平定になりました。

東征軍が江戸に向かった時、慶喜は、ひたすら恭順の意をあらはしました。この間、孝明天皇の御妹、静寛院宮の御とりなしがあり、やがて、慶喜の家臣勝安房、山岡鐵太郎の努力と隆盛の真心により、



江戸城の明渡し



白虎隊の最期

つて、慶喜は罪をゆるされ、江戸の市民は、兵火の災害からまぬかれることができました。奥羽では、會津藩主松平容保が、若松城にたてこもり、諸藩と相應じて兵を挙げましたが、やがて順逆の道をさすると、すぐに歸順を申し出ました。會津の白虎隊と名づける少年の一團が、はなばなしく戦つて、次々に討死し、わづかに残つた十九人が、飯盛山にのぼり、はるかに城を望みながら、たがひに刺しちがへて、けなげな最期をとげ

たのは、この時のことです。函館では、もと幕府の海軍を指揮してゐた榎本武揚が、五稜郭にたてこもりましたが、これも、ほどなく降りました。

のちに朝廷では、容保が、孝明天皇の御信任のもとに、京都を守護して忠勤をはげんだ功を思し召され、その罪をおゆるしになつた上、正三位をお授けになりました。武揚もまた、ゆるされて重く用ひられ、その職務にはげみました。

新政がしかれてのちに、なほかうしたさわぎが起つたのも、一つには、大名が昔のままに領内を治めてゐたからです。そこで木戸孝允は、大久保利通とともに、大名の領地を朝廷に奉還させ、新政が國のすみずみまで行き渡るやうに努力しました。すでに大名も、多くは、それを望んでゐましたから、明治二年、まづ薩摩、長門、土佐、肥

前の四藩主が相談して、領地の奉還をお願ひ申しあげ、ほかの諸藩も、續々これにならひました。朝廷では、これをお許しになりましたが、なほしばらくは、舊領を治めるやうお命じになり、やがて明治四年に、藩を廢して縣を置き、新たに知事を御任命になりました。この時にも、これまでのやうに家がただけを重んじる習はしをやめて、廣く人材をお用ひになりました。ついで明治五年には、國中に教育が行き渡るやうにと、新たに學制をおしきになり、また國民すべてが兵役に服することのできるやうにと、徴兵令をお定めになりました。かうして、政治はまつたく改り、國民の心もすつかり新しくなつて、維新のまつりごとが、大いに整つたのであります。明治天皇は、王政復古の思し召しから、神々をあつくおうやまひになり、國民にも、これをおさとしになりました。明治二年には、東

京九段坂の上に招魂社を建てて、國事にたふれた維新の將士をおまつらせになりました。また、維新の志士が手本にした、吉野の忠臣にも、それぞれ社を建てて、あつくおまつらせになりました。かうして明治の日本は、御惠みのもとに、昔ながらの美風を傳へながらも、新しく、正しく強く、しかも明るく、のびて行きました。

二 憲法と勅語

明治天皇御製

よきをとりあしきをすて、外國に

おとらぬ國となすよしもがな

わが國は、歐米の諸國が、たがひに争つたり、國內で内わもめを起

してゐる間に、もののみごとくに、維新の大業をなしとげたのであります。これらの國々は、すつかり驚き、ことに、諸大名が喜び勇んで領地を奉還したことを、ふしぎに思ひました。それは、日本の國がらが、よくわからなかつたからでせう。ちやうどこのころ、ドイツやイタリヤも、新しく生まれかはり、イギリス・フランス・ロシヤなどと、張り合ふことになりました。海國日本は、かうした國々に負けないやうに、國の力を養はなければならぬと思ひました。

それには、もつと内治や外交を整へることが大切であるとともに、朝鮮や支那と仲よくし、更に、歐米諸國のやうすを調べる必要がありました。そこで政府は、廢藩置縣がすむと、まづ清と交りを結び、ついで、岩倉具視・木戸孝允らを歐米へやつて、國々のやうすを視察させ、條約の改正をはからせました。もちろん、昔から關係の深

い朝鮮へも早く使ひをやつて、王政復古のことをつけ、改めて、交りを結ばうとしました。

ところが朝鮮は、そのころ鎖國の方針をとつてゐましたので、これに應じないばかりか、わが國が歐米諸國と交りを開いたことをあなどるといつた有様です。そこで、西郷隆盛らは、なほよく朝鮮と談判し、それでもきかなければ、これを討たうと主張しました。そこへ具視らが歸つて、内治を整へることが急務であると説き、政府の方針も、内治を先にすることにきまりました。明治六年のことであります。

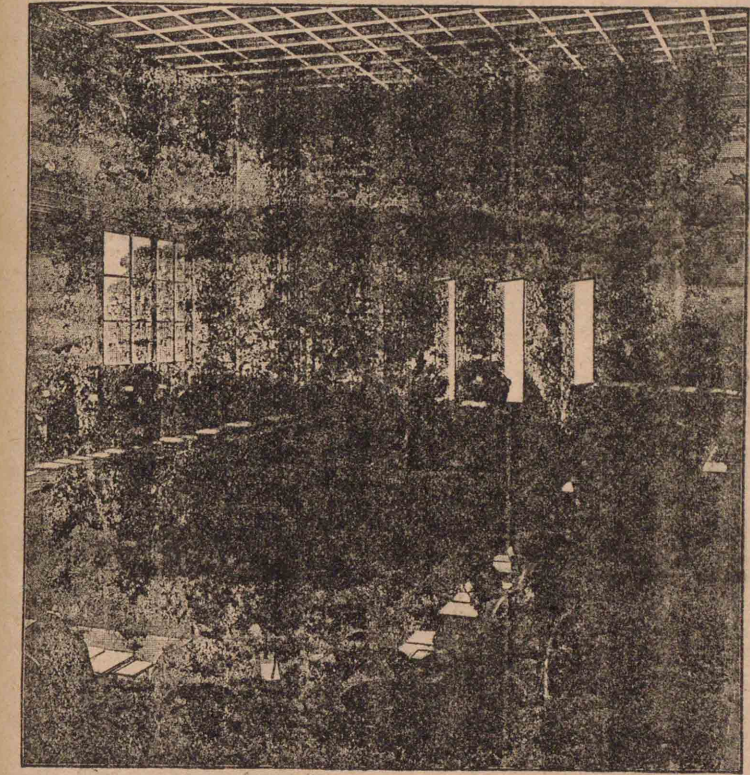
隆盛は、官を退いて鹿兒島へ歸り、青年のために學校を建てて、ひたすら教育にはげみました。ところで、その青年たちが、政府のやり方に不平をいだき、明治十年、隆盛をおし立てて、兵を擧げました。

朝廷では、有栖川宮熾仁親王を征討總督とし、諸軍を率ゐてこのさわぎをおしづめさせになりました。世に、これを西南の役といひます。かうした思ひがけないことが起つたので、内治を整へることも、なかなか容易なことではありませんでした。

明治天皇は、さきに御誓文によつて、國民に政治をたすけさせる御方針をお示しになりました。このありがたい思し召しをいただいて、政府は、その仕組みをどうするかにつき苦心しました。内治では、これが、いちばん大きな問題でありました。

そこで政府は、明治八年、地方官會議を東京に開き、十二年には、府縣會を設け、始めて民間から議員を選び出させ、國民の政治にあづかる糸口を開きました。やがて十四年、かしくも天皇は、明治三十三年を期し、國會をお開きになる旨を、仰せ出されました。國民

は、御恵みに感激して、それぞれ務めにいそしみました。



天皇は、皇祖皇宗の御遺訓に基づき、國をお統べになる根本のおきてを定めようと、かねてお考へになり、政府に憲法制定の準備をお命じになりました。明治十五年、伊藤博文は、仰せを受けて憲法の取調べに當り、やがて、皇室典範と

帝國憲法との起草に取りかかつて、明治二十一年に、草案を作りあげました。天皇は、樞密院に、草案の審議をお命じになり、終始會議に臨御あらせられ、したしく審議をお統べになりました。かくて翌二十二年に、御みづから、皇室典範及び大日本帝國憲法をお定めになり、めでたい紀元節の日に、憲法を御發布になりました。

この日、天皇は、まづ皇祖皇宗に、したしく典憲制定の御旨をおつげになつたのち、皇后とともに、宮中正殿にお出ましになり、皇族大臣、外國の使節を始め、文武百官、府縣會議長をお召しになつて、おごそかに式をお舉げになりました。盛儀が終ると、青山練兵場の觀兵式に臨御あらせられました。民草は、御道筋を埋めて、大御代の御榮えをことほぎ、身にあまる光榮に打ちふるへて、ただ感涙にむせぶばかりでした。奉祝の聲は、山を越え、野を渡つて、津々浦々に

満ち満ちたのであります。

このめでたい日、おそれ多くも天皇は、西郷隆盛の罪をゆるして正三位をお授けになつたほか、佐久間象山、吉田松陰らの志士にも、それぞれ位をたまはりました。

翌二十三年、憲法の定めに基づいて、帝國議會が東京に召集され、開院式には、したしく臨幸あらせられました。かうして、御恵みのもと、國民の活動は、いよいよ盛んになり、國力は、年とともにのびて行きました。

天皇はまた、明治二十三年に、教育に關する勅語をおくだしになつて、國民のふみ行ふべき道をお示しになりました。維新以來、海外との交通が、にはかに開けましたので、國民の中には、むやみに歐米の學問や習はしを取り入れて、わが國の美風をおろそかにする

ものが出ました。もちろん、日本の美風を守らうとする人々も、次



教育勅語をたまはる

次に現れましたが、いづばんの國民には、正しい道のよくわからない者も、少くなかつたのです。おそれ多くも天皇は、この形勢を深く御心配になり、勅語をおくだしになつて、皇祖皇宗の御遺訓を明らかにせられ、尊

い國がらをわきまへ皇運を扶翼し奉らなければならぬことを、おさとしになりました。ちやうど、紀元二千五百五十年のことで

す。ここに、いつの世までもかはらない、わが國教育の根本が、はつきりと定まりました。この御教へをいただいて、國民は、心をひきしめ、身をつつしんで、學問や仕事に、はげんだのであります。

三 富國強兵

明治天皇御製

ほどく／＼にこゝろをつくす國民の

ちからぞやがてわが力なる

安政年間に、幕府が諸外國と結んだ條約には、わが國の面目や利益をそこなふ箇條が、少くありませんでした。わが國は、外國の居留民が罪ををかしても、これをさばくことができず、また、輸入品に

對して、自由に税をかけたたり、税率をきめたりすることさへ、できない定めになつてゐました。それといふのも、海防の不十分であつた當時、幕府が、外國の要求をそのままに承知してしまつたからです。

明治の新政府は、つくづく國防の急務をさと、大村益次郎・山縣有朋・西郷從道らが、軍備の充實に、力を注ぎました。まづ明治四年、始めて近衛の御親兵と地方を守る鎮臺とを設け、廢藩の際、諸藩の艦船を全部朝廷に獻納させ、翌五年には、兵部省を分つて、陸軍省と海軍省とを設けました。やがて六年に、徵兵令が發布されて國民皆兵となり、ここに皇軍は、陸・海ともに、發達の糸口を開いたのであります。

たまたま、明治十年に起つた西南の役は、新しく組織された皇軍

の腕をためす機会となり、その後、軍事費もしだいに増して、軍備も年とともに整つて行きました。天皇は、この役に、かしくも大阪陸軍病院に行幸あらせられ、したしく傷病兵をおいたはりになりました。皇后、皇太后は、みて、づから、ほうたいをお作りになつて、負傷兵にたまはりました。將士はいふまでもなく、いつぼんの國民も、これを承つて、皇室の深い御恵みに、感泣しないものはありませんでした。また佐野常民らが、博愛社を作つて、日本赤十字社の基を開いたのも、この時のことであります。

天皇は、更に、西南の役の戦死者を、東京の招魂社におまつらせになり、明治十二年、これに、靖國神社の社號をたまはりました。やがて十五年、陸海軍人に勅諭をおくだしになつて、つぶさに、皇軍の歴史と建軍の精神とお説きになるとともに、帝國軍人の本分を、ねんごろにおさとしになりました。大御心のかたじけなさに感激



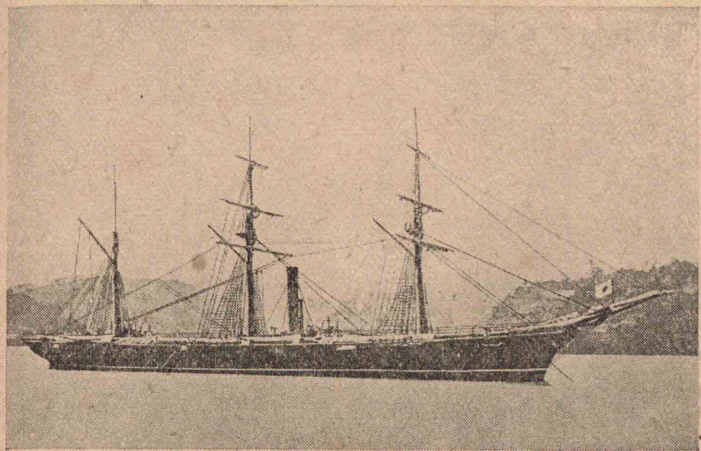
軍人勅諭をたまはる

十七八年の日清戦役には、陸海ともに、よく皇軍の面目を發揮し、戦

して、陸海の將兵はいよいよ奉公の道にいそしんだのであります。

やがて明治二十一年、陸軍の兵力は、近衛師團及び六箇師團となり、海軍は、二十七年に、軍艦三十一隻、水雷艇二十四隻、約六萬噸の兵力となりました。かくて、明治二

明治初期の軍艦

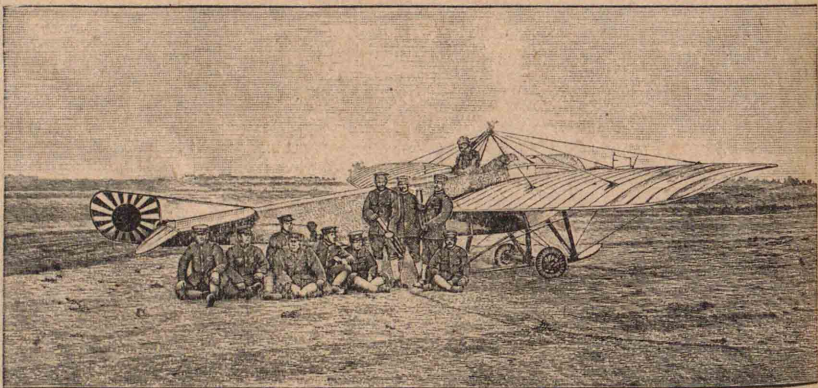


二等砲艦(清輝)

後、陸軍は、二十九年に六箇師團を増設し、海軍も、三十五年に至つて、六六艦隊を作りあげました。更に明治三十七八年の日露戦役に、皇軍は、ふたたび無敵の威力を示しました。しかも陸軍は、戦後四箇師團を加へ、明治の末には、陸海空軍の糸口を開きました。海軍もまた、大艦巨砲の方針をとつて、その威力を増し、大正の初め、艦艇の總噸數は、早くも五十萬噸を越え、戦前に比べて、約二倍の勢力となりました。維新の當時、これといふほどの軍備もなかつた日本は、明治の御代に、たあまら、世界にはこる、強國に

なつたのです。それは、御稜威のもと、軍官民が一體となり、歐米の列強に負けないやうにと、ひたすら富國強兵に努力した、たまたものであります。

軍備を整へるには、まづ産業を興して、國力を充實する必要があると知つた政府は、極力、諸産業の發達につとめました。農業、牧畜、鑛業を盛んにして、米、馬、金屬など、國防に必要な物資の増産をはげまし、交通特に海運を興して、造船術の進歩をはかりました。しかも政府は、兵器の製作や艦船の建造、そのほか鑛山の開發など、軍備に關係の



初期の軍用飛行機

深い産業をみづから營んで、民間に手本を示しました。かうして、わが産業は、めきめきと發達し、憲法發布のころには、國力も、いちじるしく充實して來ました。

この間、政府は、幕府の不始末をつぐなはうとして、條約の改正に乗り出してゐました。明治四年、岩倉具視らが歐米へ渡つて、その交渉を始めて以來、政府は、たびたび關係國と談判して、條約の改正をはかりました。ところが諸國は、東亞の各地に根城を構へて、勢力を張ることばかりを考へ、わが國力を見くびつて、なかなかこれに應じません。政府も國民も、こらへにこらへて、ひたすら國力の充實につとめました。

やがて憲法は發布され、制度や法律は整ひ、軍備は充實しました。さしもの列國も、わが國力を認めなければならなくなつて來まし

た。そこで明治二十七年、時の外務大臣陸奥宗光は、まづイギリスと談判して、つひに、條約の改正に同意させました。それは、日清戰役の起るすぐ前のことでした。イギリスは、そのころ東亞で、ロシアと張り合つてゐましたので、わが國のいひ分を通す方が得策だと考へたのでせう。しかも、この戰役で、わが國の實力が、はつきりと示されましたから、ほかの國々も、續々改正に同意しました。

この改正で、まづ裁判の不公平が取り除かれ、更に明治四十四年には、貿易上の不利な點も、すっかりなくなりました。かうして、わが國は、長い間の望みをつひに達したのです。これも、明治の日本が、涙ぐましい努力によつて、結んだみのりの一つであつたのであります。

第十三 東亞のまもり

一 日清戦役

世界の海に乗り出した日本の行手には、條約の改正ばかりではなく、色々の困難がひかへてゐました。ロシアとの國境問題も、その一つでした。さきに幕府は、千島を分有、樺太を共有と定めましたが、かうしたあいまいな、きめ方では、いつまたもつれが起るかわかりません。それに、ロシアは、孝明天皇の萬延元年、英佛聯合軍が北京を落したすきをねらつて、沿海州を手に入れ、ウラジオストツク港を築いて、東亞侵略の根城にしました。しかも、この港の名は、「東洋を支配する」といふ、ロシアの野心を、そのままあらはしたものであります。そこで、わが國は、明治七年、ロシアと談判を始め、翌八年、千島を全部日本の領地とし、樺太をロシアの領地として、國境をはつきりと定めたのであります。

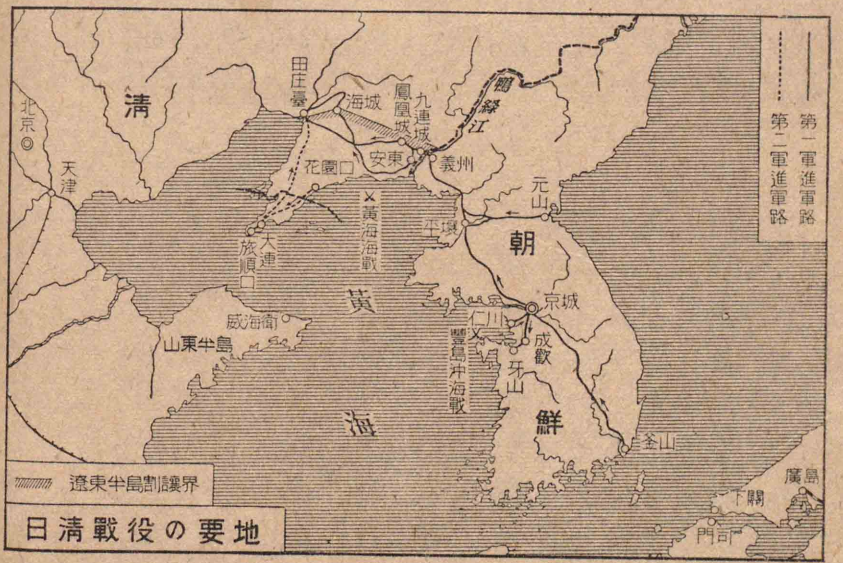
わが國は、東亞をむしばむ歐米の列強に對し、あくまで東亞をまもらうとしました。ところが、朝鮮も清も、かうした形勢に目ざめず、ことに清は、自分を世界でいちばんえらい國と考へ、そのうぬぼれがぬけません。事ごとに、わが國のやり方にいひがかりをつけて、東亞の保全を、いつそう困難ならしめました。のちに、日清戦役が起るのも、まつたくそのためであります。しかも、かうした東亞の仲間どうしのすきまにつけこんで、歐米諸國の勢力が、ますますくひ入つて來るといふ、まことに残念な、なりゆきでありました。

ロシアの南下を防ぐことは、朝鮮はもちろん、日清の兩國にとつても、きはめて大切な問題であります。それには、まづ第一に、朝鮮がしつかりしてゐてくれる必要があるのです。わが國は、明治九年、朝鮮と交りを結んで、その健全な成長を望み、朝鮮も、一時はわが國を手本として、政治を改めにかかりました。ところで、朝鮮には、以前から内わもめが絶えず、それに清が、これを屬國扱ひにして、政治に干渉するので、政治の改革が、とかく思ふやうに行きません。かへつて、いつそう亂れるやうになりました。明治十七年には、京城にゐた清兵が、朝鮮の兵といつしよになつて、わが公使館をおそひ、火を放つて、官民を殺傷するさわぎが起りました。わが政府は、朝鮮にきびしく談判して、謝罪させるとともに、かうしたことから東洋の平和が亂れることを心配し、伊藤博文を清へやつて、天津條

約を結ばせました。兩國ともに朝鮮から兵をかへし、必要があれば、たがひに通知してから、出兵することにきめました。

ところで、この條約には、朝鮮が清の屬國でないといふことが、はつきりと示してありませんでした。清は、それをよいことにして、その後も、ますます朝鮮に勢を張らうとします。そのため、朝鮮の政治は亂れる一方で、中には、ロシアと結ばうとするものさへ現れる有様でした。明治二十七年、朝鮮の心ある人々は、かうした有様にたへかねて、つひにたちあがりました。すると清は、屬國の難を救ふといふ口實で、朝鮮に出兵し、この旨をわが國に通知して來ました。わが國も、公使館や居留民を保護するために、ひとまづ兵を送りましたが、この際、日清兩國が力を合はせて、朝鮮の政治を指導することを、わざわざ清に申し入れました。

ところが清は、わがすすめに應じ
ないばかりか、かへつて陸海の大兵
を朝鮮へ送り、同年七月、豊島沖で、わ
が艦隊を砲撃しました。わが艦隊
は、ただちに應戦して、これを撃破し、
ついで陸軍も、清兵と成歡に戦つて、
大勝しました。八月一日、明治天皇
は、宣戦の大詔をおくだしになり、や
がて大本營を廣島に進めて、したし
く諸軍をお統べになりました。
皇軍の士氣は、いやが上にも振る
ひ、陸軍は平壤をおとし、海軍は



黄海に敵の北洋艦隊を撃破し、しかもわが方は、全艦無事といふ大
戦果をあげました。連戦連勝のうち、翌二十八年を迎へると、陸



黄海の海戦

軍大將大山巖は、海
軍中將伊東祐亨と
力を合はせて、敵海
軍の根城、威海衛を
攻め落しました。
この時、敵將丁汝昌
は、責任を感じて自
殺しました。祐亨
は、敵ながらもあつ
ばれな、その志をあ

はれみ、特に船を與へて、ねんごろに柩を送らせたといひます。
 やがて、わが軍は、破竹の勢で遼東半島を占領し、まさに清の都、北
 京へせまらうとしました。清は驚きあわて、李鴻章を使ひとして、
 和を請ひました。よつて内閣總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗
 光は、これと下關で談判し、清に、こののち、朝鮮の政治にいつさい干
 渉しないこと、遼東半島及び臺灣、澎湖島をわが國にゆづることな
 どを約束させて、和を結びました。時に二十八年四月で、これを下
 關條約といひます。

思へば、この戦役は、當時わが國の國運をかけた大戦役でありま
 した。かしこくも天皇は、廣島へお出ましになつて、平和の回復す
 るまで、久しく大本營のせまい御室で、日夜萬機をお統べになり、將
 兵の勞苦をおしのびになつて、寒さのきびしい冬の日にも、ストー

ブさへお用ひになりませんでした。

御稜威のもと、陸海の將兵は、



大本營で萬機をお統べになる

家を忘れ身を捨てて、大
 君のために戦ひ、官民ま
 た心を一つにして、職務
 にはげみました。かう
 して、わが國は、世界を驚
 かす大勝利を博したの
 であります。しかも、口
 シヤの南下は防がれ、清
 もやつと目がさめて、東
 洋平和の基も、始めて固

められる日が來たのであります。

ところで、ここに、思ひがけないことが起りました。ロシアが、ドイツ・フランスの二國をさそつて、日本が遼東半島を領有することは、東洋平和に害がある。」と主張し、これを清に返すやう、わが國に申し入れて來たのです。そのころヨーロッパでは、ロシア・フランスの二國と、ドイツ・オーストリア・イタリヤの三國とが、それぞれ同盟を作つて、張り合つてゐました。ですから、フランスはともかくとして、ドイツまでがロシアのさそひに應じたのは、ロシアの目をもつばら東方へ向けさせたいからでありました。

わが國は、戦後のことではあり、内外の形勢を深く考へて、三國のすすめに應じることにしました。おそれ多くも天皇は、特に詔をおくだしになつて、東洋平和のために遼東半島を還附する旨をお宣べになり、あはせて、國民の覺悟をおさとしになりました。國民



城入御北臺の親久能

は、涙にむせび齒をくひしばり、今後、どんな困難にもたへしのんで、一日も早く、大御心を安んじ奉らうと、堅く心に誓ひました。そこで、わが國は、産業を興し軍備を整へ、國民の心をひきしめて、ひたすら國力の充實につとめるとともに、新たに領土となつた臺灣の經營にも、大いに力を注ぎました。島民で、なほ命に従はないものがありましたので、北白川宮能久親王は、近衛師團の將兵を率

治三十一年、福建省を他國に與へないことを清に約束させ、また、昔からなじみの深いシャムと、改めて條約を結び、わが國土をまもり、東洋の平和をたもつことにつとめました。

さすがの清も、わが國にやぶれて、幾分目がさめたのか、一部の人は、明治の新政にならつて、國力の回復をはからうとしました。しかし、多くの人々は、世界の形勢を知らず、自分の力をもわきまへず、いたづらに感情に走つて、ただちに外國の勢力を驅逐しようとしめました。明治三十二年、義和團といふ暴徒が起ると、清の政府は、ひそかに兵を出してこれを助け、北京にある各國の公使館を圍ませました。翌三十三年に入つて、さわぎは、ますます大きくなり、わが公使館の人々も殺傷される有様です。よつてわが國は、兵をやつて、關係國の軍隊とともに、さわぎを取りしづめました。清は、暴

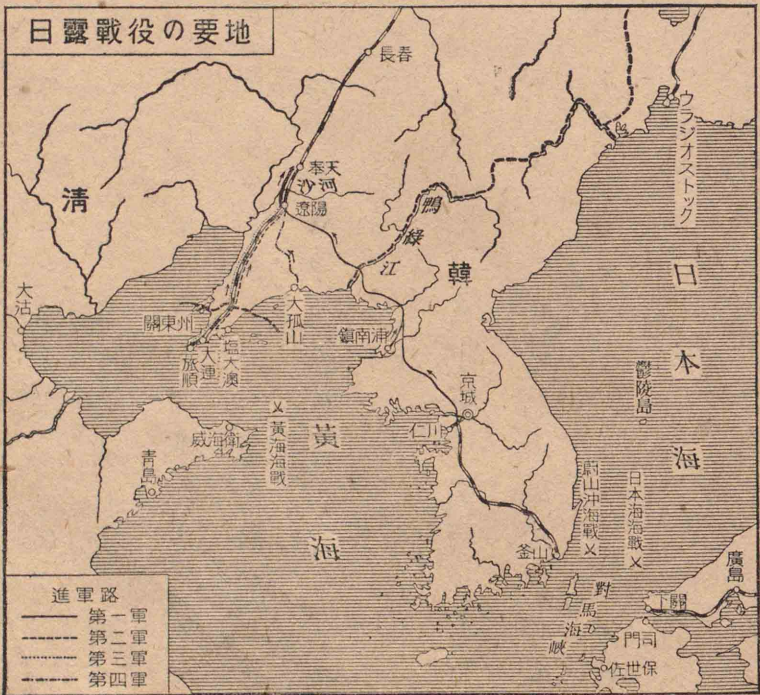
徒を罰し、列國に償金を出し、罪をわびて、やつと事がさまりました。これを、北清事變といひます。この事變において、わが軍は、特にめざましい活躍を見せました。將兵が勇敢で規律の正しいことは、列國の軍隊をはるかにしのいでゐました。ところで、歐米諸國特にロシヤは、清のかうした輕はずみに乗じて、更に侵略の手をのばして行つたのであります。

北清事變が起ると、ロシヤは、しきりに滿洲に出兵して、各地を占領し、變後、ますます兵力を増強するばかりか、やがて、韓をうかがふやうになりました。ところで、イギリスは、かねて、ロシヤが南下するとインドが危いことを、心配してゐます。そこでわが國は、清、韓兩國の領土をまもり、東洋の平和をたもつために、明治三十五年、イギリスと同盟を結び、また、しばしばロシヤと談判して、兵をひきあ

げさせようとししました。しかしロシアは、少しも誠意を示さず、翌三十六年に入つて、更に兵力を増し、つひに北韓の地を、をかし始めました。そこでわが國は、三國干涉以來の非道をこらしめるため、明治三十七年二月、決然として國交をたちました。早くも、わが艦隊は、旅順・仁川の港外に、敵艦を撃沈して敵の出鼻をくじき、二月十日、宣戰の大詔がくだされました。

黒木大將の率ゐる第一軍は朝鮮から、奥大將の第二軍、野津大將の第四軍は、遼東半島の二方面から、三道それぞれ、滿洲の野に轉戦しながら、敵の根城遼陽へ向かつて進みました。やがて、總司令官には大山元帥が、總參謀長には兒玉大將が任じられ、九月、三軍の總攻撃は、敵將クロバトキンの死守する遼陽を、わづか十日で攻め落しました。しかも、援兵を加へて陣容を立て直した、敵軍二十餘萬の反撃を、激戰數日、またまた沙河で撃ち破りました。

この間、海軍は、まづ旅順港の閉塞をはかり、廣瀨中佐を始め、壯烈無比な決死隊の活躍によつて、その目的を達しました。乃木大將の率ゐる第三軍が、旅順の攻撃を始めると、敵艦隊は、封鎖を破つて港外へのがれましたが、たちまち黃海で撃滅され、ウラジオストック艦隊も、これが救援の途中、蔚山沖で撃滅されま

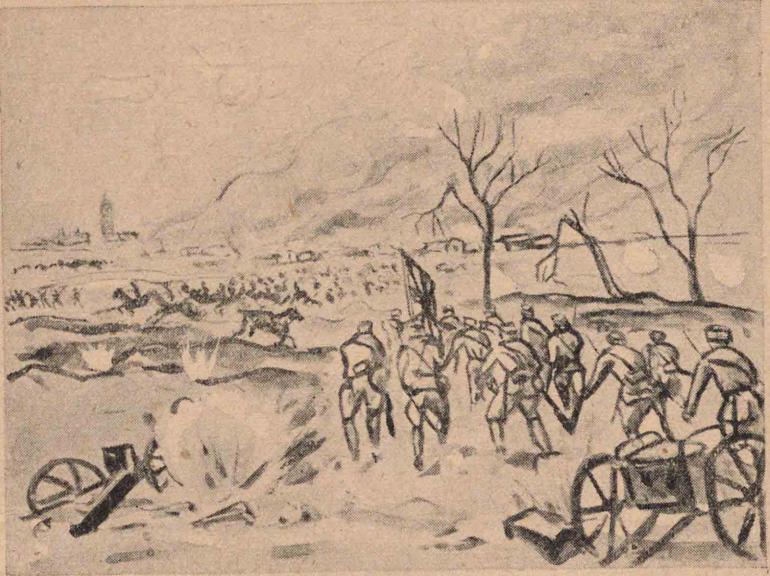


した。かうして、八月のなかば、制海權は、早くもわが手に歸したのであります。

旅順の要塞は、さすがに、ロシヤが防備に手をつくし、難攻不落を世界にほこつただけあつて、その攻略は、なかなか容易でありませんでした。しかも、わが忠勇な陸海の將兵は、悪戦苦闘、いくたびか決死の突撃をくりかへして、つひに要害二〇三高地をうばひ、他の砲臺も、次々に占領しました。ここに敵將ステッセルは、力盡きて、翌三十八年一月一日、降伏を申し出ました。かしこくも明治天皇は、敵ながらもあつばれな、ステッセルの奮闘をおほめになり、旅順開城の際には、特に寛大な扱ひをお許しになりました。

旅順がおちいると、第三軍は、ただちに北上して、滿洲軍の主力に加里、大山總司令官の指揮のもとに、全軍およそ四十萬、クロバトキ

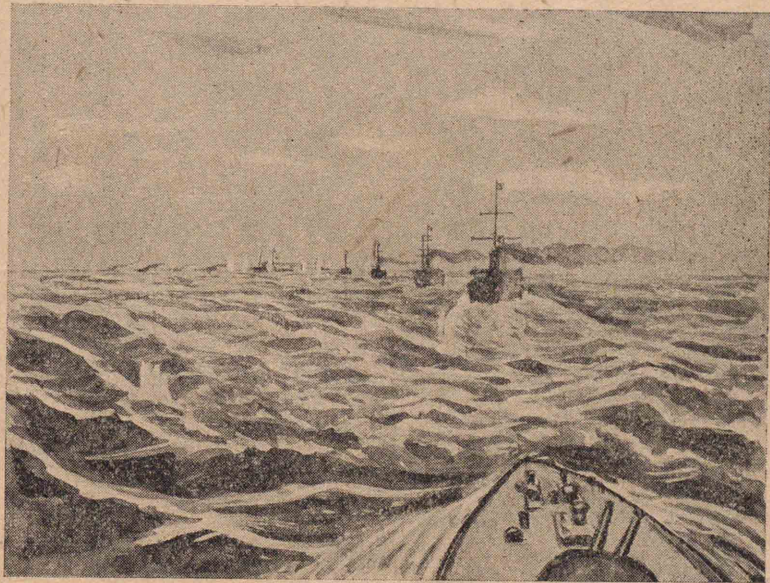
奉天の大會戰



ンの率ゐる五十餘萬の敵軍にせまつて、いよいよ最後の決戦を試みることになりました。奉天の大會戰は、かくて開始され、わが將兵の意氣は天をつくばかりで、激戦まさに二十日、大いに敵を破り、三月十日、つひに奉天を占領しました。

このころ、敵海軍の主力バルチック艦隊は、制海權の回復を夢みて、はるばる東洋へ廻航中でありました。やがて五月二十七日、敵艦隊は、大たんにも對馬海峽を通りぬけようと

しました。わが聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎は、四十餘隻の艦隊を率ゐて、これを迎へ撃ち、ここに、皇國の興廢をかけた大海戦が、折から風烈しく波の高い日本海上に、くりひろげられました。この日を待ちかまへたわが將兵は、司令長官の激勵にこたへて勇戦力闘、決戦二晝夜にわたつて、敵艦十九隻を撃沈し、五隻を捕らへ、敵司令長官を俘虜にしました。わが損傷は、きはめて輕微で、世界の海戦史に例のない全



日本海の大戦

勝を博しました。しかもこの際、わが將兵は、溺れる敵兵を救ひ、俘虜を慰めるなど、よく皇軍の面目を發揮したのであります。

ついで別軍は、更に樺太を占領しましたが、日露戦役は、奉天の會戦と日本海海戦によつて、すでに大勢が決してゐました。米國大統領ルーズベルトは、この形勢を見て、わが國とロシヤとの間に立ち、講和をすすめることになりました。わが國は、これに應じ、外務大臣小村壽太郎らをアメリカのポーツマスへやつて、ロシヤの全權委員と談判させ、審議を重ねた末、三十八年九月、ポーツマス條約を結びました。すなはち、わが國は、ロシヤに、韓を保護することに干涉しないことや、清の領土に手をつけないことを約束させ、また、關東州の租借權、長春新京旅順間の鐵道と附近の炭坑、及び樺太の南半と沿海州の漁業權とをゆづらせることに定めました。戦が

終ると、陸海の諸軍は、次々に凱旋しました。天皇は、伊勢に行幸あらせられ、したしく、神宮に平和の回復をおつけになりました。

日露戦役は、世界の一大強國を相手とする大戦役で、日清戦役に比べて、はるかに大きく、また困難な戦でありましたが、わが國は、御稜威のもと、舉國一體、連戦連勝して、ロシアの野心をくじき、大いに國威をかがやかしました。かくて、三國干渉以來十年間の勞苦も、つひにむくいられたのであります。それといふのも、御恵みによつて、教育が廣く國民にゆきわたり、盡忠奉公の精神が深く養はれてゐたからです。しかも、この戦勝によつて、わが國は、世界における地位を、諸外國にはつきりと認めさせるとともに、東亞のまもりに重きを加へ、これまで歐米諸國に壓迫されて來た東亞諸民族の自覺をうながし、これを元氣づけたのであります。

第十四 世界のうごき

一 明治から大正へ

わが國は、日露戦役後、歐米諸國と大使を交換して國交を厚くし、イギリス・フランス・ロシア・アメリカ合衆國とは、更に條約を結んで、東亞の安定をはかりました。ところが、東亞の形勢には、注目すべき變化が起りました。それは、ロシアに代つて、アメリカ合衆國が乗り出して來たことです。

米國の東亞に對する欲望は、さきに、ハワイやフィリピンを手に入れたから、急に高まつて來ました。日露の講和に仲だちしたこと

を思にきせて、滿洲に勢力をのばさうとさへしました。しぜん、わが國との關係は、しだいに曇りを生じて來ました。すると、英國もまた、米國に氣がねして、わが國をうとんじ始めました。かの日英同盟も、日露戦役の際、一時固くなりましたが、明治の末には、すつかりゆるみしました。米國が日英同盟をいやがり、それに英國も、このころ露國と仲よくなつたので、そろそろ、同盟の必要を認めなくなつたからです。

この間、わが國は、樺太の開發、關東州の經營につとめるとともに、東亞の安定をめざして、韓の保護にも、ずるぶん力を用ひました。まづ、韓に對する他國の干渉を、いつさい取り除き、ついで、内政の改革を指導しました。かうして韓は、ますますわが國に對する信賴を深め、韓民の中には、東洋の平和をたもつため、日韓兩國が一體に

なる必要があると考へるものが、しだいに多くなりました。韓國皇帝も、かねてこれをお望みになつてゐましたので、明治四十三年、天皇にいつさいの統治權をおゆづりになることになりました。明治天皇は、この申し出をおきき入れになつて、特に韓國併合の詔をおくだしになり、韓國皇帝もまた、韓民に對し、日本の政治に従つて、いよいよ幸福な生活を送るやう、おさとしになりました。



内 鮮 一 體

また、韓といふ名も朝鮮と改り、新たに置かれた總督が、いつさいの政務をつかさどることになりました。古來わが國と最も關係の深かつた半島の人々は、ここにひとしく皇國の臣民となり、東洋平和の基は、いよいよ固くなつたのであります。

維新以來、わが國運は日に月に盛んとなり、國威は隆々として世界にかがやく折から、思ひがけなくも、天皇は、明治四十五年七月、御病におかかりになりました。國民の驚きは、いかばかりか、上下こそつて、ひたすら御平癒をお祈り申しあげました。御病狀を案じ奉つて、二重橋のほとりに集るものは、日に幾千とも知れないほど、夜を通して祈り續ける人々も、少くありませんでした。ところが、御病は日ごとに重らせられ、つひに七月三十日、御年六十一歳で、おかくれになりました。國民の悲しみは、たとへやうもなく、世界の



明治天皇

の國々もまた、御高徳をたたへ奉り、つしんで崩御をおいたみ申しあげました。かしこくも明治天皇は、内外多事の際、御年少の御身で御位をおつぎにな

り、萬機をお統べになること、まさに四十六年に及びました。その間、維新の大業をおとげになり、新政を整へて國力を充實あらせられ、皇威を世界にのべて、興亞の礎をお築きになりました。まこと

に、明治の御代における國運の進展は、東西古今の歴史に、その例を見ないところであります。

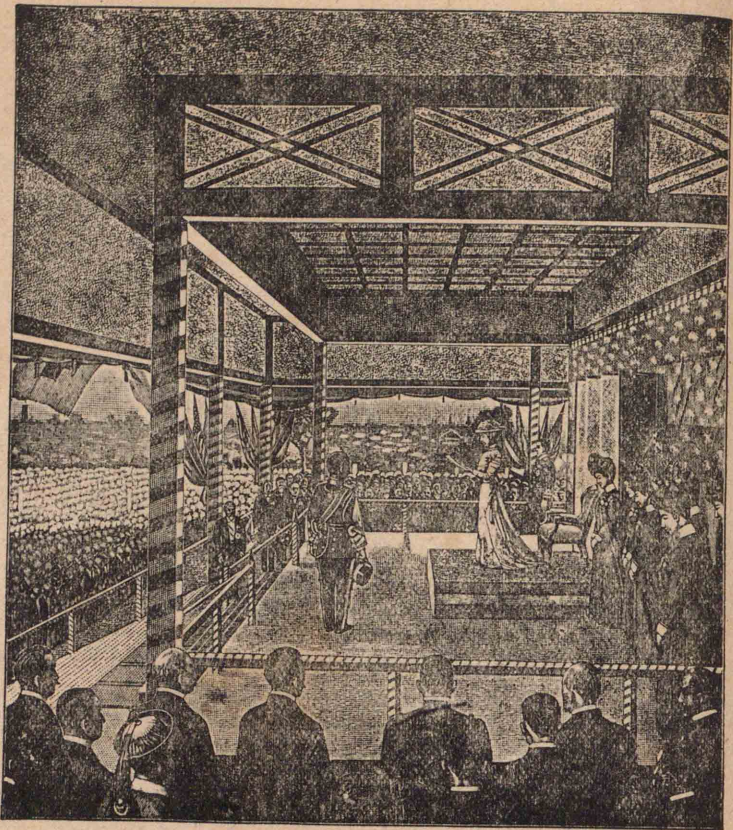
天皇は、皇祖皇宗の御遺訓に基づき、つねに御みづから手本をお示しになつて、ふみ迷ふ國民をおみちびきになりました。また、明け暮れ、萬民のことに大御心をかけさせられ、數々の御恵みをたまはりました。その御心を、

照るにつけても、思ふかな

わが民草のうへはいかにと

とおよみになつていらつしやいます。われわれ國民は、ただありがたさに、涙がこぼれるばかりであります。

天皇がおかれになると、ただちに第百二十三代大正天皇が、御位をおつぎになり、年號を大正とお改めになりました。この年の九月、大葬



昭憲皇太后のおいつくしみ

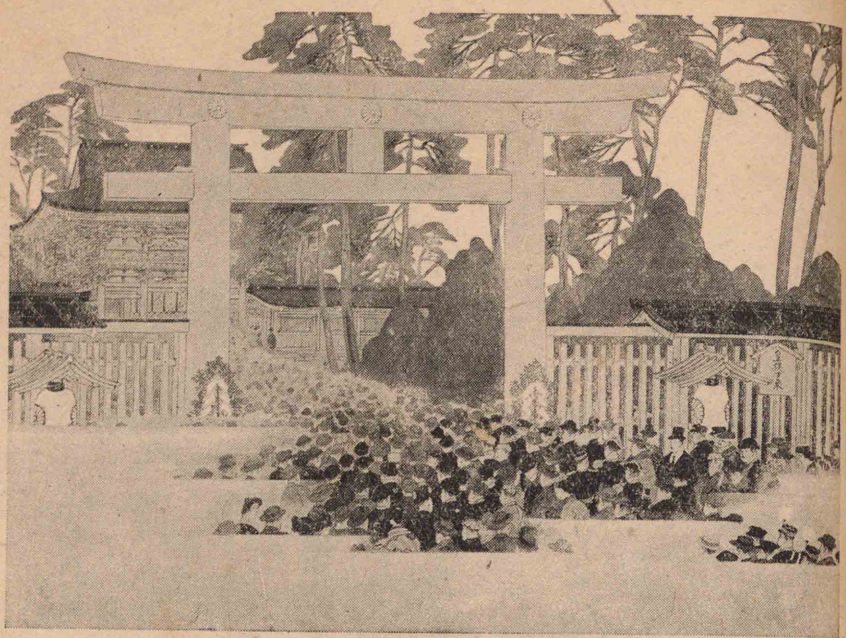
の御儀があり、伏見の御山陵にをさめまゐらせました。靈柩がまさに宮城をお出ましになる時刻に、乃木大將と夫人は、その邸で自刃して、明治天皇の御あとをしたひ申しあげました。

明治天皇神去り

まして、悲しみの涙さへまだ乾かないのに、昭憲皇太后もまた、御病

のため、大正三年四月に、おかくれになりました。重ね重ねの悲しみのうちに、やがて大葬の御儀があり、伏見桃山東陵にをさめまゐらせました。皇太后は、いつくしみの御心に深くいらせられ、戦時には、傷病兵をおいたはりになり、つねには、学校、病院、工場などに行啓あらせられて、教育や産業をおはげましになり、慈善、施療の業をおすすめになりました。

東京代々木の明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后をおまつり申しあげるお社であります。國民は、ながく御二方の御高德を仰いで、神宮に御陵にお参りするものが、つねに絶えません。昭和二年、第百二十四代今上天皇は、明治天皇のお生まれになつた十一月三日を、明治節とお定めになりました。國をあげて、この日をお祝ひ申しあげ、とこしへに、大御業をおしのび申しあげるのであります。

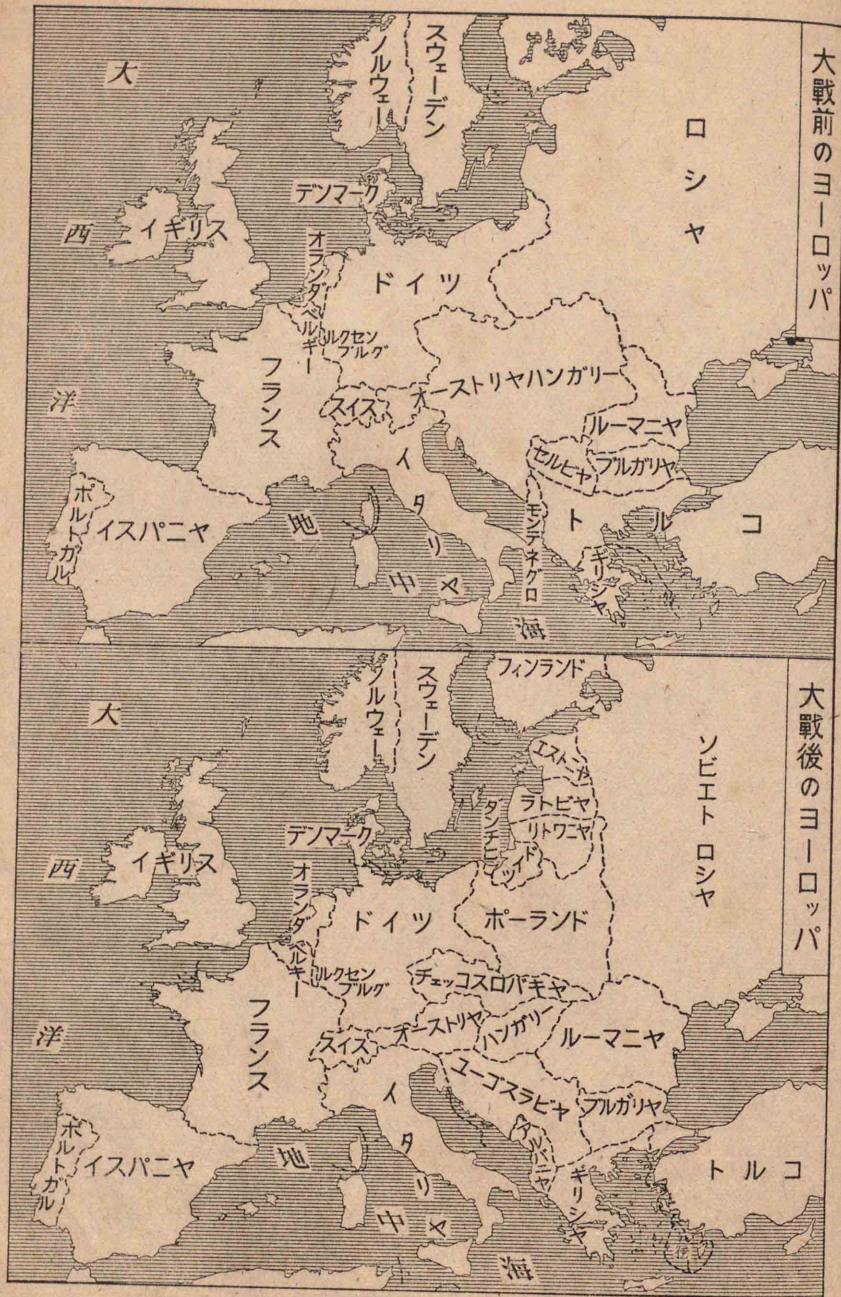


明治神宮に参拜する人々

明治天皇昭憲皇太后の諒闇が終つて、大正天皇は、大正四年の十一月、始めて皇室典範の定めにつとり、即位の禮を、京都の皇宮でお舉げになりました。ここに大正の御代は、御惠みのもと、洋々として開けて行きます。しかもこのころ、ヨーロッパ諸國は戦争の眞最中で、わが國もまた、東亞の保全のため、正義の戦を進めてゐたのであります。

二 太平洋の波風

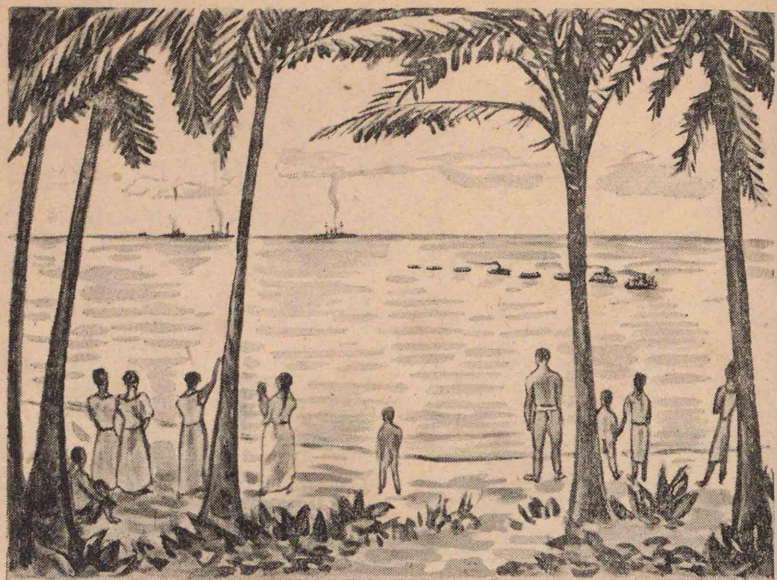
ヨーロッパに戦争が起つたのは、大正三年七月のことであり、ヨーロッパでは、かねて、ドイツ・オーストリア・ハンガリー・イタリアの三國とフランス・ロシアの二國とが、それぞれ同盟を結んで對立してゐました。ところが、それまで、どちらのみかたもしないでゐたイギリスが、日露戦役のころから、フランスに近づき、やがて明治四十年には、すっかりフランス・ロシア側の仲間入りをしました。それは、イギリスが、めきめきと強くなつたドイツの勢を、恐れたからです。一方ドイツ側では、イタリアとオーストリア・ハンガリーとの仲がわるくなつて、イタリアは、同盟から離れさうになつてゐました。



日露戦役でわが國の勝つたことは、かうしたヨーロッパの形勢に、少からぬ影響を與へてゐます。イギリスがロシアに近づくやうになつたのは、その一つです。また、ロシアがやぶれたので、オーストリア・ハンガリーは、バルカン半島へ手をのばし始めました。ところで、バルカンの一國、セルビアの一青年が、オーストリア・ハンガリーの皇嗣を暗殺したため、兩國の間に戦端が開かれ、この波紋がひろがつて、つひに、ドイツを中心とする同盟國と、ロシア・イギリス・フランス等の聯合國との大戦争になりました。

わが國は、當時なほ諒闇のこともあり、もつばら中立を守つて、東洋の平和をたもたうとしました。ところがドイツは、膠州灣の兵力を増し、しかもその艦艇が、しきりに東亞の海に出没します。よつてわが國は、東洋平和のため、また日英同盟のことをも考へて、

帝國艦隊の南洋進出



大正三年八月二十三日、ドイツと國交をたち、この日、かしくも、宣戰の大詔がくだりました。海軍は、ただちに膠州灣を封鎖し、陸軍は、背後から青島を攻撃して、同年十一月、これをおとしいれました。わが國で、飛行機を戦鬪に用ひたのは、この時が最初でした。この間、わが艦隊の一部は、南洋へ進み、敵艦を太平洋から追ひ拂つて、ドイツ領のマーシャル・マリアナ・カロリンなどの諸群島を占領しました。ドイツの艦艇は、なほ

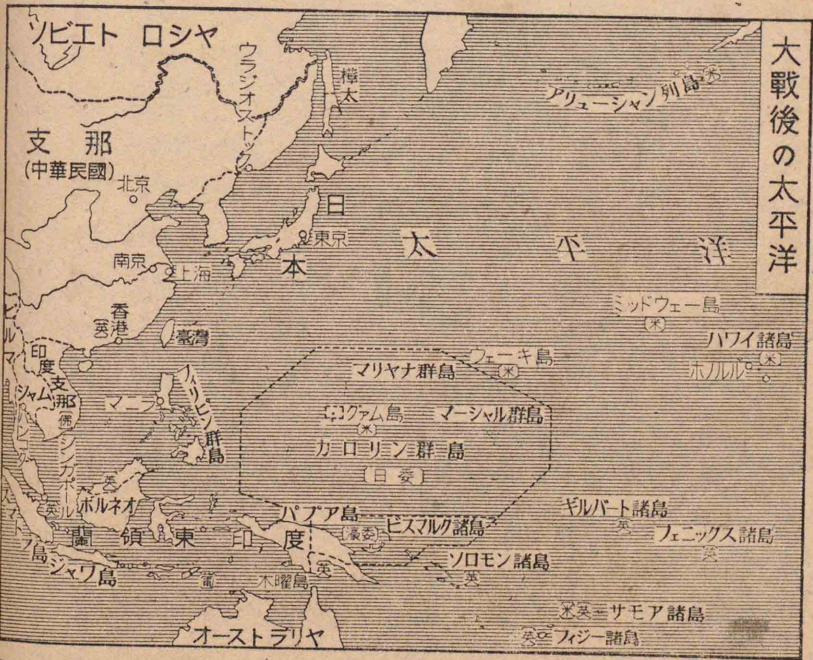
インド洋や地中海に現れ、盛んに各國の商船を撃沈し、わが商船にも損害を與へました。そこで、わが艦隊は、遠くこの方面へも出動し、さまざまの困難をしのいで、通商の保護に當りました。

この間、ヨーロッパの形勢は、トルコ、ブルガリヤが同盟國にかり、イタリヤが聯合國にかりましたが、戦況は、同盟國に有利でした。大正六年に、やつとアメリカ合衆國が、聯合國にかりました。アメリカは、それまで中立を守り、通商で、ばくだいな利益を占めてゐたのです。これと前後して、ロシアに内亂が起り、やがてソビエト政府ができる、翌七年、ドイツと單獨講和を結びました。ところで同盟國も、このころから急に弱つて足なみが亂れ、まづブルガリヤ、トルコが降伏し、やがてオーストリア、ハンガリー、ドイツにも、相ついで内亂が起り、つひに屈して、講和を求めました。

翌大正八年、平和會議が、フランスのパリで開かれ、ベルサイユ條約が成立しました。これによつて、わが國は、膠州灣と山東省とにもつてゐたドイツのいつさいの權益を得、赤道以北の舊ドイツ領南洋群島の統治を委任されました。また、この條約にそへて、各國は國際聯盟を作り、以後たがひに力を合はせて、世界の平和をはかることになりました。

かうして、世界の平和は、ひとまづ回復されましたが、大戰の結果として現れたものは、アメリカ合衆國やイギリスのわがままなるまひでした。米國は、自分のいひ出した國際聯盟にさへ加らず、英國は、聯盟を自分の都合のよいやうに利用することにつとめました。そればかりか、日本の興隆をねたんで、事ごとにわが國の發展をおさへようとしてきました。それは、米英が東亞に野心をもつて

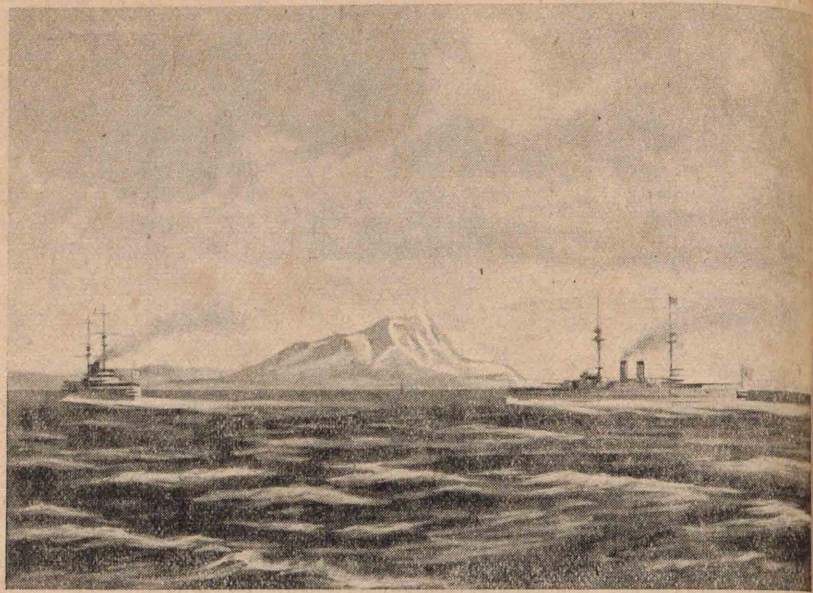
あるからで、米國は大戦中、わが海軍が南洋へ進出することをさへ、いやがったほどです。大正三年に、パナマ運河が開通してから、米國の東亞に對する欲望は、いよいよ大きくなつてゐました。しぜん世界の目は、戦後、ヨーロッパから太平洋へ移りました。大正から昭和へかけて、國際問題の中心になつた海軍軍備縮小會議は、まさに、米英が太平洋を支配しようとする下心の現れでありました。



大正十年、米國の發起で、日英米佛伊等の諸國が、ワシントンに會議を開き、軍備の制限、太平洋東亞に關する諸問題を協議しました。その結果、軍備の制限では、日英米の主力艦の比率を三五五(佛伊は一七五)と定め、また、太平洋の島々の武備を制限することにきめました。太平洋東亞の問題については、別に條約を結び、この方面にある各國の島々に、問題が起つた時は、共同で處理し、かつ、支那の領土を尊重することなどを、約束しました。しぜん日英同盟は、不必要といふので、廢棄されました。しかも會議は、米英の無理が通つて、わが國に不利な點が少なくなつたのですが、わが國は、もつぱら列國の信義に期待して、寛大に事に處しました。すると、米英の非道は、更に露骨となり、わが移民に壓迫を加へ、大正十三年、米國は、わざわざ法律まで作つて、移民をこばむやうになりました。

この間、米英は支那に對して領土を尊重するやうに見せかけながら、ひそかに利益をあさりました。支那では、明治の末に清がほろび、中華民國がこれに代つてゐました。しかも支那は、北清事變以來のわが好意を忘れ、しだいに、米英にたよつて、わが國を輕んじるやうになりました。かくて日支の關係は、前途なかなか多難で、東洋の平和も、ふたたび危く見えて來ました。

わが國も、たびたびの戰勝から、内には、ゆだんの心も起つてゐました。世界のうごきの表面だけしか見ない人が多く、だいな東亞、ことに支那に對する研究が、不十分でした。國民の氣持も、いとなくゆるんで、生活が、はなやかになつてゐました。折しも大正十二年、關東地方に大震災が起り、その災難で、人々の心がぐらつきました。おそれ多くも、國民精神作興の詔書をおくだしになり、深



皇太子がヨーロッパへお渡りになる

く國民をお戒めになつたのは、この時のことであります。さきに、大正十年三月、皇太子裕仁親王は、八重の潮路をはるばると、ヨーロッパへお渡りになり、國々をめぐつて皇威を御發揚の上、同年九月、めでたく還啓あらせられました。時に、天皇御病のため、皇太子は、同年十一月、皇室典範の定めにより、攝政の任におつきになりました。大正十五年十二月、天皇の御

病は、いよいよ重く、國民こぞつて御平癒をお祈り申しあげたそのかひなく、つひに同月二十五日、御年四十八歳で、おかくれになりました。



した。かしこくも大正天皇は、特に國際上多事の際、明治天皇の御遺業をおつぎになり、内に、民正草をおいつくしみにな大つて、國力の充實につとめさせられ、外に、國威をおのべになつて、世界平

和のために、御心をお用ひになりました。その御高徳、御鴻業は、國民はもとより、世界のひとしく仰ぎ奉るところであります。

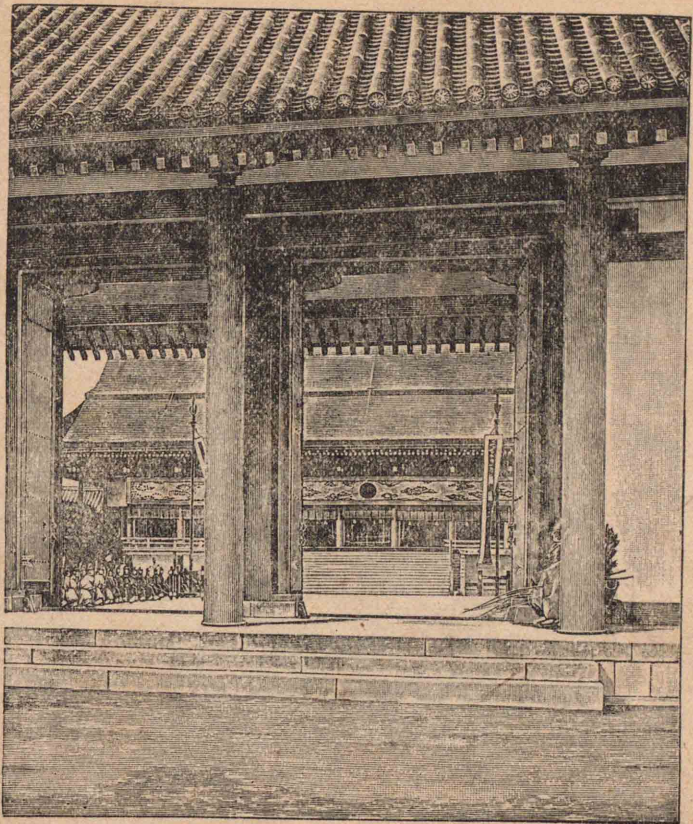
第十五 昭和の大御代

一 満洲事變

今上天皇は、大正天皇の第一皇子にましまし、明治三十四年四月二十九日に、御降誕あらせられました。御年十六歳の時、皇太子にお立ちになり、やがて内外多事の折に、攝政の御重任をおはたしになりました。

大正天皇がおかくれになると、ただちに踐祚あらせられ、年號を昭和と改め、ついで文武百官を召して、朝見の儀を行はせられました。やがて昭和二年二月、大正天皇の大葬の御儀があり、多摩陵に

をさめたてまつりました。



れをお宣べになりました。この時、國民は、一せいに萬歳をとなへ

禮 位 の 即

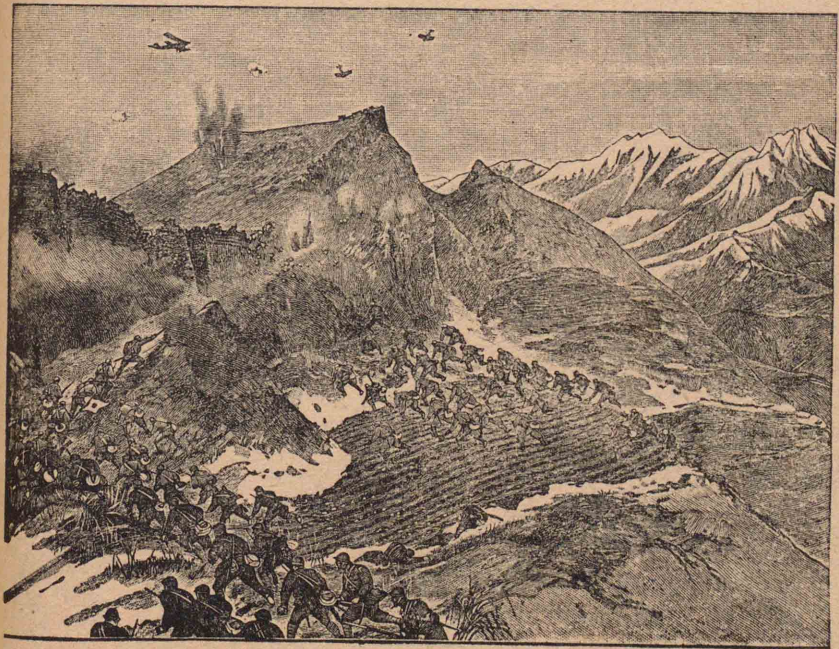
諒闇があげて昭和三年十一月、即位の禮を、京都の皇宮でお舉げになりました。まづ、賢所大前の御儀があつて、皇祖天照大神に、即位の由をおつげになり、ついで、紫宸殿の高御座にお登りになつて、廣く天下に、こ

て、寶祚の御榮えをお祝ひ申しあげました。天皇は、ついで大嘗祭を行はせられ、天照大神を始め天地の神々に、したしく神饌を供へて、夜もすがらおまつりになり、かぎりなく尊い御盛儀は、かくてめでたく終りました。

昭和の御代が隆々と開けてゆく時、海外の諸國は、世界平和を望むわが國の誠意を無視して、勝手なふるまひを續けてゐました。イギリスは、ひそかにシンガポールの武備を固め、アメリカ合衆國は、たくみに支那をあやつり、ソビエト聯邦は、軍備の擴張に日も足らぬ有様です。中華民國もまた、このころ、國內がひとまづしづまるとともに、いよいよ、排日の氣勢を高めて來ました。しかも米英は、更にわが國をおさへようとして、またまた、軍備縮小の相談をもちかけ、昭和五年、英國の發起したロンドン會議では、わが公正な意

見をかへりみず、補助艦の比率七割を、わが國におしつけました。

支那は、じつところへてゐるわが國の態度を、臆病と見て取つたのか、ますます排日の氣勢をあふり、はては、わが居留民に危害を加へ、滿洲におけるわが權益をさへおびやかす舉に出ました。すなはち、昭和六年九月、支那軍は、不法にも、南滿洲鐵道を爆破しました。東洋の平



滿洲事變

和を望み、隣國のよしみを思へばこそ、たへしのんで來たわが國も、事ここに至つて、決然としてたちあがりました。支那は、國際聯盟にすがり、列強をみかたに引き入れようとします。わが國は、正々堂々、膺懲の軍を進めて、たちまち、支那軍を滿洲から驅逐しました。これを滿洲事變といひます。

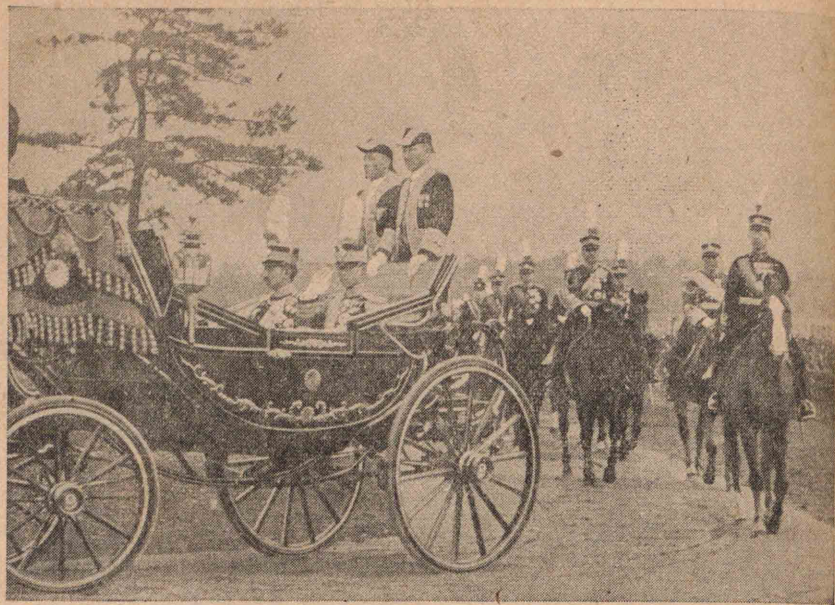
長い間、悪政のもとに苦しんでゐた滿洲の住民は、これを機會に獨立の運動を起し、昭和七年三月、新たに國を建てて滿洲國とし、溥儀執政をいただくことになりました。わが國は、東洋平和のため、その建國を喜び、同年九月、列國に先だつて獨立を承認し、日滿議定書を交換して、兩國の共同防衛を約束しました。

ところが、國際聯盟は、わが公正な處置を認めず、滿洲國の發達をさまたげようとしました。よつてわが國は、昭和八年三月、きつぱ

りと、**聯盟を脱退**しました。この時、かしくも天皇陛下は、**詔**をおくだしになつて、日本の進むべき道をおさとしになり、國民の奮起をおはげましになりました。國民は、つつしんで詔を拜し、東洋永遠の平和のためには、いかなる**困難**にもたへしのぶことを誓ひました。しかも國民は、**滿洲事變**を通して、世界のうごきをはつきりと知り、ここに、**自主獨往**の覺悟を固くしたのであります。

昭和八年十二月二十三日、皇太子**繼宮明仁親王**が、お生まれになりました。國民は、久しく皇太子の**御誕生**をお待ち申しあげておりましたので、その喜びはたとへやうもなく、**奉祝**の聲は、全國に満ちあふれました。滿洲國でも、家ごとに日の丸の旗をかかげて、心から御誕生をお祝ひ申しあげました。

滿洲國は、獨立後わづか一二年の間に、見違へるほど、りつばな國



滿洲國皇帝の御答禮

になり、國民の生活も、日々に安らかとなりました。昭和九年三月には、**溥儀**執政が、國民に推されて、皇帝の位におつきになり、國は**滿洲帝國**となりました。秩父宮**雍仁親王**は、天皇の御名代として、**滿洲國**へお渡りになり、したしく、お祝ひのことはをお述べになりました。翌昭和十年、皇帝は、**御答禮**のため、わが國をお訪ねになり、日滿の親善は、年とともに深まつて行きま

した。

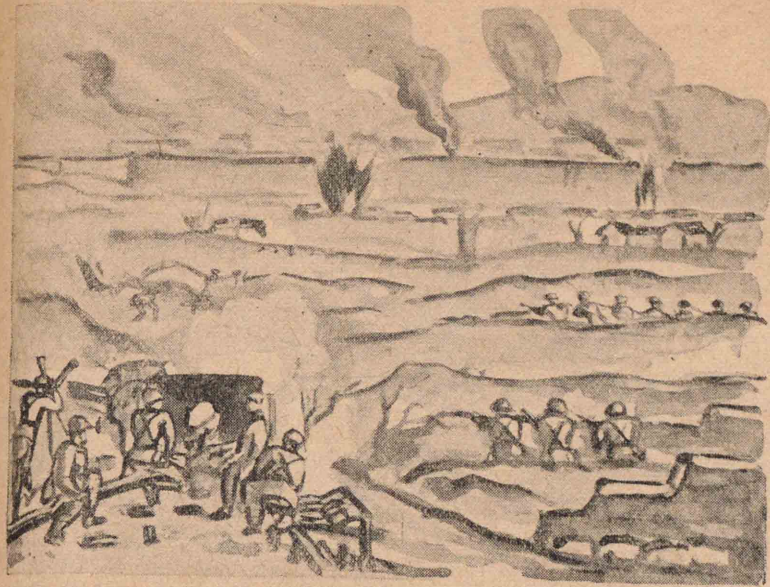
国際聯盟がわが正當な行爲を認めない今となつては、ワシントン會議以來の軍備制限條約は、國防上、たうていしのびがたいものとなりました。よつてわが國は、昭和九年十二月、條約の廢棄を、アメリカ合衆國に通告しました。かくて一年のち、ふたたびロンドンで會議が開かれた際、わが國は、國防上最も公正な意見を、堂々と述べました。しかも、米英兩國がこれをこばむに及んで、わが國は、決然として會議を脱退しました。ここに、帝國海軍の日ごろの猛訓練は、更にいつそうの激しさを加へて行きました。

二 大東亞戰爭

わが國は、さきに内鮮一體の實を擧げて、東洋平和の基を築き、今また、日滿不可分の堅陣を構へて、東亞のまもりを固めました。しかも、東洋永遠の平和を確立するには、日滿支三國の緊密な提携が、ぜひとも必要であります。わが國は、支那にこの旨をつけて、しきりに協力をすすめました。ところが支那の政府は、わが誠意を解せず、歐米の援助を頼みに排日を續け、盛んに軍備を整へて、日滿兩國にせまらうとしました。

果して、昭和十二年七月七日、支那兵が、北京近くの蘆溝橋で、演習中のわが軍に發砲して戰をいどみ、更に、わが居留民に危害を加へるものさへ現れました。

南京 攻 略



わが國は、支那の不法を正し、さわぎをくひ止めやうとつとめました。が、支那の非道は、つのであるばかりでした。ここに、暴支膺懲の軍が派遣せられ、戦は、やがて北支から中支、南支へとひろがりました。

この間、忠烈勇武な皇軍の將士は、各地に轉戦して、次々に敵の根城を落し、早くも十二月十三日、首都南京を攻略して、城頭高く日章旗をひるがへし、翌十三年十月には、廣東、武昌、漢口等の要地を占領しました。し

かも、海軍が沿岸の封鎖に當り、陸海の荒鷲が、大陸の空を制壓しましたので、重慶へ落ちのびた敵の政府は、息もたえだえの有様になりました。

かしこくも天皇陛下は、宮城内に大本營を置いて、日夜軍務をお統べになり、事變一周年の當日には、勅語をたまはつて、將士の奮闘と銃後の勉勵とおほめになり、日支の協力による東亞の安定を、一日も早く實現するやうにと、おはげましになりました。聖旨を奉體して、わが政府は、この年の明治節に、戦の目的が、支那の目をさまして、東亞に新しい秩序を作ることにある旨を聲明しました。わが誠意に感激した支那の人々は、いくつか新しい政府を作り、これが基となつて、昭和十五年三月、汪精衛の率ゐる新國民政府が、南京で成立しました。やがて十一月、わが國は、これと條約を結び、

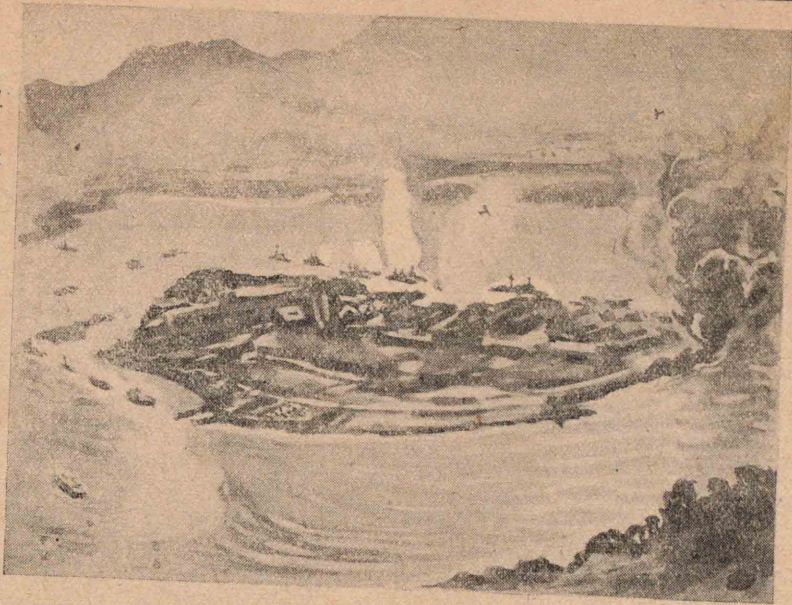
ここに日・滿・支三國が力を合はせて、東亞新秩序の建設に、はげむことになりました。しかし、重慶の政府は、なほ米・英の援助によつて、からくも命をつなぎ、あくまで、わが國に手むかひ續けました。

このころ、すでにヨーロッパでも、戦争が起つてゐました。歐洲大戦後およそ二十年間、ひたすら國力の回復につとめて來たドイツが、昭和十四年に、うらみ重なる英・佛その他の諸國と、戦争を開始しました。しかもドイツは、たちまち、ポーランド・オランダ・ベルギーを撃ち破り、ついでフランスを降伏させ、その勢は、なかなか盛んであります。それに今度は、イタリヤが、ドイツのみかたとして立つことになりました。

わが國は、かねがね獨伊兩國と、志を同じうしてゐましたので、昭和十五年九月、改めて同盟を結び、三國ともどもに力を合はせて、一

日も早く戦亂をしづめ、世界の平和を確立しようとして約束しました。わが國は、東亞をりつばな東亞に立て直すことを使命とし、獨伊は、歐洲を正しい歐洲に造りかへることを使命とする、三國は、この大業をなしとげるため、たがひに助け合ふことになつたのです。

ところで、米・英の兩國は、重慶政府を助けて、支那事變を長引かせるばかりか、太平洋の武備を増強し、わが通商をさまたげて、あくまで、わが國を苦しめようとしてきました。しかも、わが國は、なるべく事をおだやかに解決しようとして、昭和十六年の春から半年以上も、誠意をつくして、米國と交渉を續けましたが、米國は、かへつてわが國をあなどり、獨ソの開戦を有利と見たのか、仲間の國々と連絡して、しきりに戦備を整へました。かうして、長い年月、東亞のためにつくして來たわが國の努力は、水の泡となるばかりか、日本自身の國土



眞珠灣爆撃

さへ危くなつて來ました。

昭和十六年十二月八日、しのびに
しので來たわが國は、決然として
たちあがりました。忠誠無比の皇
軍は、陸海ともどもに、ハワイ・マライ
・フィリピンをめざして、一せいに進攻
を開始しました。勇ましい海の荒
鷲が、御國の命を翼にかけて、やには
に眞珠灣をおそひました。水づく
屍と覺悟をきめた特別攻撃隊も、敵
艦めがけてせまりました。空と海
からする、わが猛烈な攻撃は、米國太

平洋艦隊の主力を、もののみごとくに
撃滅しました。この日、米英に對す
る宣戰の大詔がくだり、一億の心は、
打つて一丸となりました。二重橋
のほとり、玉砂利にぬかづく民草の
目は、決然たるかがやきを見せまし
た。

ほとんど同時に、英國の東洋艦隊
は、マライ沖のもくづと消え、續いて、
かれが、百年の間、東亞侵略の出城と
した香港も、草むす屍とふるひたつ
わが皇軍の精銳によつて、たちまち

シンガポール入城



攻略されました。昭和十七年を迎へて、皇軍はまづマニラを抜き、また破竹の進撃は、マライ半島の密林をしのいで、早くも二月十五日、英國の本陣、難攻不落をほこるシンガポールを攻略しました。その後、月を重ねて、蘭印を屈伏させ、ビルマを平定し、コレヒドール島の攻略がなり、戦果はますます擴大されました。相つぐ大小の海戦に、撃ち沈められた敵の艦船は、おびただしい數にのぼつてゐます。しかも、細戈千足の國のますらを、西に遠くマダガスカルの英艦をおそひ、北ははるかに米領アリューシャン列島を突いて、世界の國々をあつといはせました。

この間、三國同盟は、一だんと固められて、獨伊も米國に宣戦し、日本とタイ國との同盟が成立して、大東亞建設は、更に一步を進めました。今や大東亞の陸を海を、日の丸の旗が埋めつくし、日本をしたふ東亞の民は、日に月によみがへつて行きます。すべてはこれ御稜威と仰ぎ奉るほかありません。

三 大御代の御榮え

わが國は、尊い戦を進めながら、かがやかしい紀元二千六百年を迎へたのであります。三國同盟が成立したのも、新しい支那と條約を結んだのも、この年、すなはち昭和十五年のことです。

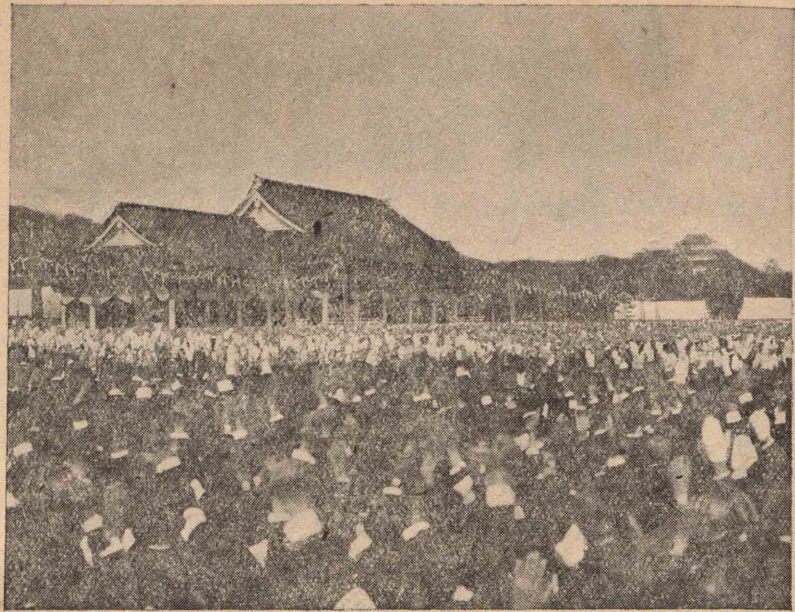
かしこくも天皇陛下は、このめでたい年の紀元節に、詔をおくだしになつて、國民すべてが、神武天皇の御創業をおしのび申しあげ、いかなる難局をも切り開くやうにと、おさとしになりました。ついで六月には、神宮を始め、橿原神宮、伏見桃山陵、多摩陵などに、御參

拜あらせられ、紀元二千六百年をお迎へあそばされたことを、したしく御報告になりました。

同月、滿洲國皇帝は、ふたたび御來朝、天皇陛下に、紀元二千六百年のお祝ひを、したしくお述べになり、皇大神宮、橿原神宮、伏見、桃山陵などに、御參拜になりました。皇帝は、かねがね、わが皇室の御徳をおしたひになり、日本と同じやうに滿洲國を治めたいとお考へでありましたので、御歸國後、建國神廟を帝宮内に建て、天照大神をおまつりになつて、日夜、大神の御心を奉體し、政治におはげみになることになりました。

この年の九月、北白川宮永久王が、尊い御身をもつて、蒙疆の地で御戰死をおとげになりました。國民の驚きは、ひと通りでなく、御祖父能久親王の御事をもしのび奉つて、感激の涙にむせびました。

奉祝の式典



やがて、菊花かをる十一月、宮城前の式場に、天皇、皇后兩陛下の臨御を仰ぎ、おごそかに、紀元二千六百年奉祝の式典が催されました。この日、大空はさわやかに澄み渡つて、一片の雲影もなく、美しい式殿の兩側には、銀色の銚が、秋日を受けてきらきらとかがやき、朱色の旛が、そよ風にゆらいでゐました。式場をうづめた參列者は、大君の尊い御姿を仰ぎ、ありがたい勅語をたまはつて、感きはまり、聲

をかぎり、萬歳を奉唱しました。津々浦々の民草もまた、これに和し、奉祝の喜びのうちに、遠く國史をふりかへつて、難局打開の覺悟を新たにしました。

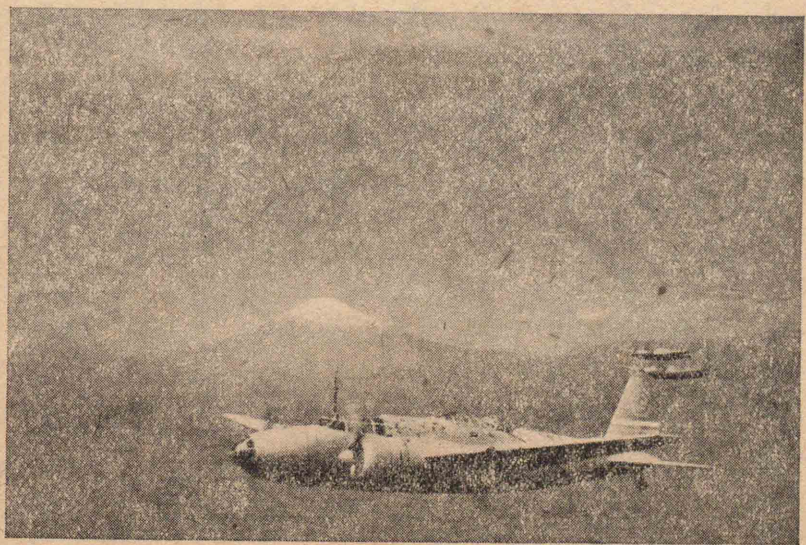
遠すめろぎのかしこくも、はじめたまひしおほ大和、一まことにわが大日本帝國は、皇祖天照大神が、天壤無窮の神勅をくだして、國の基をお固めになり、神武天皇が、皇祖の大御心をひろめて、即位の禮をお舉げになつた、尊い國であります。以來、萬世一系の天皇は、いつの御代にも、深い御恵みを民草の上にお注ぎになり、國力は時とともに充實し、御稜威は遠く海外に、かがやき渡りました。

御恵みのもと、世々の國民は、天皇を現御神とあがめ、國の御親とおしたひ申しあげて、忠誠をはげんで來ました。その間、皇恩になれ奉つて、わがままをふるまひ、太平に心をゆるめて、内わもめをく

り返し、時に無恥無道の者が出たことは、何とも申しわけのないこととでありました。しかし、さうした場合でも、親子一族國民が、たがひに戒め合ひ、不覺をさとし、無道をせめて、國のわざはひを防ぎました。清麻呂が道鏡の非望をくじき、重盛が父のわがままをいさめ、光圀宣長らが、大和心を説いて、尊皇の精神を吹きこんだなど、その例です。しかも、元寇の時のやうに、いつたん外國と事の起つた場合には、國民こそつてふるひたち、戦線銃後ともどもに、力を合はせて國難を打開しました。また、大化の改新、建武の中興、明治の維新のやうに、内外多事の際には、勤皇の人々が續々現れて、大御業をおたすけ申しあげました。従つて、わが國では、一見世の中が亂れたやうな場合でも、決して國の基を動かすやうなことはありません。かうしたことは、わが國だけに見られることで、すべては御稜

威のかがやきであり、尊い國がらの現れであります。

昔、支那の勢が盛んで、あたりの國々を従へてゐた時でも、日本だけは、堂々と國威を示して、一步もゆづりませんでした。四百年ばかり前から、まづポルトガル・イスパニヤが、ついでオランダ・イギリス・ロシアが、最後にアメリカ合衆國が、盛んに東亞をむしばみました。わが國は、いち早くその野心を見抜いて、國の守りを固くし、東亞の國々をばげまして、歐米勢力の驅逐につと



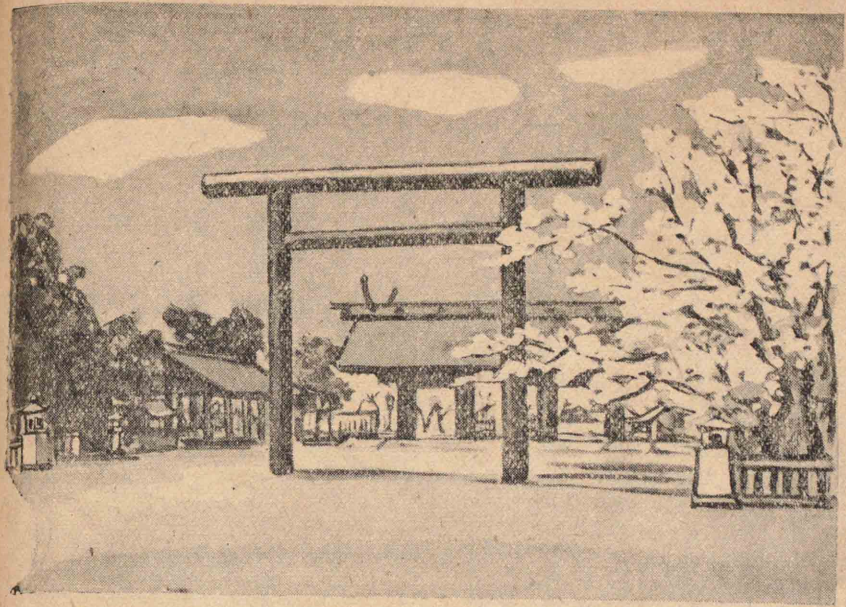
日本のしるし

めて來ました。さうして、今やその大業を完成するため、あらゆる困難をしのいで、大東亞戦争を行つてゐるのです。皇國の興隆、東亞の安定は、この一戦とともに開けてゆくのであります。

昭和十四年五月二十二日、かしこくも天皇陛下は、全國青少年學徒の代表を、宮城前で御親閲になり、特に勅語をたまはつて、日本の將來をになふりつばな人物になるやうにと、おさとしになりました。つづいて、昭和十六年には、御國のお役に立つ、りつばな國民を育てるために、小學校は、國民學校に改りました。私たちは、現にこの國民學校で、楽しく勉強してゐるのであります。

私たちは、楠木正成が、櫻井の里で、正行をさとしたことばを、よくおぼえてゐます。

「獅子は子を産み、三日にして、數千丈の谷に投ず。その子、まこ



天皇陛下の御ために

とに獅子の氣性あれば、はね返りて死せずといへり。汝すでに十歳に餘りぬ。一言耳にとどまらば、わが教へにたがふことなかれ。今度の合戦、天下の安否と思へば、今生にて汝が顔を見んこと、これを限りと思ふなり。……敵寄せ來らば、命にかけて忠を全うすべし。これぞ汝が第一の孝行なる。」

私たちは、一生けんめいに勉強し

て、正行のやうなりつばな臣民となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません。

終

年表

御代	紀元	年號	事	題目
一〇六 正親町天皇	二二二七	永祿十年	織田信長が重ねて勅をいたたく	御代
同	二二二八	同 十一年	信長が足利義昭とともに上洛する	の
同	二二三〇	元龜元年	信長が皇居を御修理申しあげる	し
同	二二三三	天正元年	室町幕府がほろびる	づ
同	二二三六	同 四年	信長が安土城を築く	め
同	二二四二	同 十年	天目山の戦 本能寺の變 山崎の戦	
同	二二四五	同 十三年	秀吉が關白に任じられる	
一〇七 後陽成天皇	二二四七	同 十五年	秀吉が軍を九州に進める 天主教の禁止	
同	二二四八	同 十六年	聚樂第行幸 秀吉が貨幣を造る	
同	二二五〇	同 十八年	秀吉が北條氏を征して全國を平定する	
同	二二五一	同 十九年	秀吉がインド・フリピンに入貢をすすめる	
同	二二五二	文祿元年	朝鮮の役が始る 秀吉が朱印船の制度を始める	
同	二二五八	慶長三年	秀吉がなくなる	

一〇七 後陽成天皇	二二六〇	慶長五年	關原の戦 京都所司代の設置	江
同	二二六一	同 六年	○イギリスが東印度會社を設立する	
同	二二六三	同 八年	徳川家康が御料を奉る	
同	二二六九	同 十四年	家康が征夷大將軍に任じられる	
一〇八 後水尾天皇	二二七三	元和元年	オランダ人に通商を許す	戸
同	二二七五	同 十八年	イギリス人に通商を許す 支倉常長の渡歐	
同	二二七九	同 五年	豊臣氏がほろびる 幕府が公家や大名の取りしまりを定める	
同	二二八八	寛永五年	○オランダがバタビヤに總督を置く	と
一〇九 正天皇	二二九〇	同 七年	濱田彌兵衛がオランダ人をこらしめる	長
同	二二九五	同 十二年	幕府が洋書の輸入をさしとめる	
同	二二九六	同 十三年	參勤交代の制度が整ふ	
同	二二九七	同 十四年	國民の海外へ行くことが禁止される	
同	二二九九	同 十六年	島原の亂	崎
一一〇 後光明天皇	二三〇一	同 四年	オランダ人以外の西洋人の來航を禁止する	
同	二三〇一	慶安四年	保科正之が幕府の政治をたすける	
一一一 後西天皇	二三一七	明暦三年	徳川光圀が大日本史の編纂を始める	
同	二三二一	寛文元年	○明がほろび清が支那を統一する	

一三二 明治 天皇

二五二七	慶應三年十二月	慶喜が大政を奉還する
二五二八	明治元年正月	鳥羽伏見の戦 開國和親の方針をお定めになる
	三月	五箇條の御誓文をおくだしになる
	七月	江戸を東京とお改めになる
	八月	即位の禮をお舉げになる
二五二九	同 二年三月	東京へ行幸になる
	五月	ふたたび東京へ行幸になる
	六月	國內のさわぎが全くしづまる
二五三〇	同 三年十月	諸藩が領地をおかへしする 東京招魂社の創建
二五三一	同 四年正月	○イタリヤの統一が完成する
	七月	○ドイツの統一が完成する
	十月	廢藩置縣
二五三二	同 五年八月	岩倉具視らを歐米諸國へおつかはしになる
	十一月	學制をおしきになる
		徴兵令をお定めになる

の び ゆ く 日 本

二五三三	明治六年正月	徴兵令の發布
二五三五	同 八年五月	ロシアと千島樺太交換條約を結ぶ
二五三七	同 十年六月	始めて地方官會議をお開きになる
二五三九	同 十二年三月	西南の役が起り九月にしづまる
二五四一	同 十四年十月	始めて府縣會が開かれる
二五四二	同 十五年正月	東京招魂社に靖國神社の社號をたまはる
二五四四	同 十七年十二月	國會を開くことを仰せ出される
二五四五	同 十八年四月	軍人に勅諭をおくだしになる
	十二月	朝鮮京城の變
二五四八	同 二十一年四月	清と天津條約を結ぶ
	五月	内閣の制度が定まる
二五四九	同 二十二年二月	市制町村制がしかれる
二五五〇	同 二十三年五月	近衛師團と六箇師團が設けられる
	十月	皇室典範をお定めになり帝國憲法を御發布になる
二五五四	同 二十七年七月	府縣制郡制がしかれる
	十一月	教育に關する勅語をおくだしになる
		第一回の帝國議會をお開きになる
		イギリスと改正條約を結ぶ ついで各國とも結ぶ

の び ゆ く 日 本

二五五四	明治二十七年七月	豊島沖の戦 成歡・牙山の戦
二五五五	八月	清に對する宣戰の詔をおくだしになる
二五五五	九月	大本營を廣島にお進めになる 黄海の海戦
二五五五	二月	威海衛占領
二五五五	四月	下關條約が成立する 三國干涉
二五五五	十月	能久親王が臺灣をおしづめになる
二五五五	十月	朝鮮が國號を韓と改める
二五五五	三月	○ドイツが膠州灣をロシアが旅順大連を租借する
二五五五	七月	○英國が威海衛を租借する 米國がハワイを併合する
二五五五	十二月	○米西戰爭の結果米國がフィリピンを手に入れる
二五五九	十一月	北清事變が起る ○フランスが廣州灣を租借する
二五六一	四月	今上天皇御誕生
二五六二	正月	イギリスと同盟を結ぶ ○シベリヤ鐵道が完成する
二五六四	二月	ロシアに對する宣戰の詔をおくだしになる
二五六五	正月	旅順の要塞をおとしいれる
二五六五	三月	奉天占領
二五六五	五月	日本海海戦
二五六五	九月	ポーツマス條約が成立する

東亞のまもり

大正天皇

二五七〇	明治四十三年八月	韓と併合條約を結ぶ
二五七一	四月	イギリスと第二回の改正條約を結ぶ
二五七二	二月	○清がほろび中華民國が起る
二五七二	七月	崩御
二五七二	九月	明治天皇の大葬の御儀を行はせられる
二五七四	四月	昭憲皇太后が崩御あらせられる
二五七四	七月	○歐洲に大戰が起る
二五七五	八月	ドイツとの戰を宣せられる ○パナマ運河の開通
二五七五	十一月	青島の要塞をおとしいれる
二五七七	十一月	即位の禮をお舉げになる
二五七七	二月	わが艦隊が地中海方面に出動する
二五七九	六月	ベルサイユ條約が成立する
二五八一	三月	皇太子裕仁親王が歐洲へお渡りになる
二五八一	十一月	ワシントン會議の開會 皇太子が攝政におなりになる
二五八四	七月	○米國が排日法をしく
二五八六	十二月	崩御

世界のうき

一二四 今上天皇

二五八七	昭和二年二月	大正天皇の大葬の御儀を行はせられる
二五八八	同 三年十一月	即位の禮をお舉げになる
二五九〇	同 五年四月	ロンドン海軍軍縮條約が成立する
二五九一	同 六年九月	滿洲事變が起る
二五九二	同 七年九月	滿洲國の獨立を承認する
二五九三	同 八年三月	國際聯盟脫退を通告する
二五九四	同 九年十二月	皇太子明仁親王がお生まれになる
二五九六	同 十一年一月	ワシントン條約の廢棄を通告する
二五九七	同 十二年七月	ロンドン會議を脱退する
二五九九	同 十四年五月	支那事變が起る
二六〇〇	同 十五年九月	青少年學徒に勅語をたまはる
二六〇一	同 十六年六月	○ふたたび歐洲に大戰が起る
		○獨伊三國同盟が成立する 北白川宮永久王の御戰死
		○獨ソの開戦 日華基本條約の成立
		米英に對する宣戰の大詔が降る ○獨伊の對米宣戰

昭和の大御代

昭和十八年三月一日 印刷
 昭和十八年三月四日 翻刻印刷
 昭和十八年三月卅一日 翻刻發行

著作権所有

著作權者

文部省

初等科國史下

定價金參拾錢

昭和十八年三月一日
 文部省検査済
 日五月三年八十和昭



發行所

東京書籍株式會社

翻刻發行兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

初六
年
各

広島大学図書

2500029793

